無職転生後記-目錄

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 1』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

書籍版からの方ははじめまして。
WEB版のほうから読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。
理不尽な孫の手です。

このコーナーは作品のこぼれ話という事だそうです。
こぼれ話。
というわけで、無職転生の『誕生秘話』について書いていこうと思います。

・プロトタイプ
無職転生にはプロトタイプがあります。
その構想を考えたのは約7年前。
私がまだ血気盛んなワナビ（ライトノベル作家になりたい人たちの総称）であり、プロになるという事に情熱を燃やしていた時のことです。

当時の構想メモによると、無職転生の原型は「魔術師の主人公が様々な仲間と冒険や恋をしたりする話」でした。
よくあるファンタジー系の学園ものですね。
ただ、当時の私はワナビらしく、周囲に迎合しない気高くも無意味なプライドを持っていました。
周囲に迎合したくない、似たような作品は書きたくない。
という思いもあり、この作品が書かれる事はありませんでした。
このまま行けば、ハードディスクの片隅に埋もれ、パソコンの買い替えと共に記憶の彼方へと消えてしまった事でしょう。

でも、そんな構想がある日、日の目を見ることになります。

きっかけは、『小説家になろう』というサイトです。
そのサイトとめぐり合った時、ワナビとしての私は死んでいました。
書いても書いても上達せず、応募をしても一次選考すら通らない。
すでに新作を書いて新人賞に応募する気力は無く、筆を折り、もう小説なんか書かねえぞと決意して、二年ほど経過した頃です。

当時、私はWEB小説というものを馬鹿にしていました。
文章を書き始めたばかりの中高生が的ハズレな指摘をしあう、プロのステージからは数段下にあるもの。
そんな事を思っていたのです。

そんな私でしたが、小説家になろうというサイトで作品を読み、驚きました。
文章力の有無にかかわらず、実に楽しそうに小説を書いているのです。
また「文章力の高い人の書いた作品が、必ずしも高評価を得ているわけではない」という所にも感銘を受けました。

内容にしても、異世界転生や、異世界トリップといった、言ってみれば一般人から馬鹿にされそうな類のものです。
しかし私はそういったジャンルが好きでした。
でも、ワナビ時代にはこんなのは時代遅れだし、売れないから書かない方がいい、と思っていました。
書くのを恥ずかしいとさえ思っていたように思います。

そんなジャンルをこのサイトでは書いてもいいのだと思った時、私の中で変遷が起こりました。
今まで自分の中で、小説を執筆する際にこだわっていた部分を捨てることを決意しました。

『誰も見たことの無いアイデアを重視する』とか、
『パロディは絶対に許さない』とか、
『テンプレは害悪だ』とか、
『安易なエロは滅せよ』とか、
『人気作品の真似をする風潮がウザイ』とか、
そうしたものを捨てて、新たに物語を書こうと思った時に目に付いた構想が、無
職転生のプロトタイプでした。

・無職転生の誕生へ
小説家になろうの作品に感化された私は、プロトタイプの無職転生（以下、プロト無職）をもとに小説を書き始めました。
でも、
『パロディを多めに盛り込む』
『テンプレもどんどん使っていく』
『エロい展開も多く』
と、それらのことをプロト無職の構想で使うことは困難でした。

そこで主人公に一味加えることにしました。
まず、主人公をエロい事が大好きなオタクの中年男性にする。
そうする事で、自然にエロ展開にもっていき、さらにパロディも多用することができる。

彼はオタクであり、あらゆるテンプレを知り尽くしています。
そんな彼が、「テンプレ展開をテンプレ展開だと理解しつつ解決する」。
メタ的な観点を作品に盛り込んだわけです。

ただ、それだけでは、何も面白くありません。
テンプレを綺麗に解決する、それだけの話になってしまいます。
そこで、ひと味加えました。

物語は彼の思い通りに進みます。
しかし、解決した先には人との出会いがあり、触れあいがあり、彼の思っていたのとは少し違う展開になるのです。
そうした展開の中で、彼は前世の事を思い出したり、反省したりしながら、変化していく。
そういった構造を思いつきました。

おお、これは書いている自分も面白くなりそうだ！

と、思ってできたのが、無職転生となります。

あくまで趣味として書こう。
楽しんで書こう。
書きたいものを書こう。

そうして書かれた作品がWEBで人気となり、書籍化まで果たすに至りました。
私はそのことを、純粋にうれしく思っています。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 2』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

2巻からの方は（あまりいないと思いますが）はじめまして。
1巻からの方はありがとうございます。
WEB 版の方から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。
理不尽な孫の手です。

このコーナーはこぼれ話という事で、1巻の時は誕生秘話について書きました。
なので、今回も誕生秘話を書こうと思います。
2巻までに出てきた、三人のヒロインの誕生秘話、初期コンセプトについてです。

・ルーデウス・グレイラットという人物
ヒロインを語る前に、まず主人公についての説明をしておきましょう。
彼は前世の知識と、極めて高い魔術の才能を持って生まれた人物です。
1巻では、彼はその才能を伸ばすべく、切磋琢磨を始めます。
環境にも恵まれ、前世の知識もあって彼は周囲から天才と呼ばれるようになります。
ですが、前世の記憶というのが正の部分なだけではなく、負の部分も受け継いでおり……というのは、1巻を読んで頂いた方にはわかっていただけるかと思います。

この主人公にはどんなヒロインが似合うか。
彼が好きになるのはどんな女性か。彼を好きになるのはどんな女性か。
そういった時にまず考えたのが、主人公の前世のダメな部分を助けてくれるヒロインです。
ロキシー・ミグルディアの誕生です。

・ロキシーという人物
彼女は、主人公の弱い部分を担当しています。
前世が原因でどうしようもなく落ち込んでいる時に現れて助けてくれるのが彼女です。
彼女は何事についても一生懸命で、主人公が無理だろうと思うような事でも自分なりに考え、対処しようとします。
主人公はそんな彼女を尊敬するようになります。
憧れのお姉さんのようなポジションのキャラクターですね。

しかし、このままでは非常に一方的な恋愛模様になってしまいます。
主人公が好きになるヒロインの次に、主人公を好きになるヒロインが必要だと考えました。
ロキシ←主人公←誰か、という矢印にすることで、バランスを取ろうとしたわけです。
そこで登場したのが、シルフィエットというヒロインです。

・シルフィという人物

彼女は主人公の強い部分を担当しています。
シルフィは自分の意見が弱く、非常に依存的な性格をしています。
彼女から見た主人公は、何でも自分で決めて、何でも自分で進んでいくスーパーマンです。
主人公の真似をして魔術を習うシルフィは、彼のようになろうと一生懸命ですが、追いつく事はできません。
ゆえに主人公にとってシルフィは弱く、守るべき存在であり、彼女を守る事が自分の力の証明になります。

と、ここまで考えて、シルフィというキャラクターが非常に弱い事に気づきました。
自分の意見を持たず、依存的で相手の言うことをなんでも聞いてしまう。
そんな人物のことを「異世界でやり直そう、頑張ろう、一人前になろう」と思っている主人公が惚れるでしょうか。好きになるでしょうか。
否です。同情も欲情もするでしょうが、愛情には発展しないでしょう。
そこで、彼女にはしばらく修行してもらい、主人公に惚れてもらえるような自立心を育んでもらい、別のヒロインを出す事にしました。
シルフィと対照に位置するヒロイン。
そう、エリス・ボレアス・グレイラットです。

・エリスという人物
彼女も主人公の強い部分を担当しています。
エリスは非常に強い自我を持ち、人の言うことを聞きません。
極めて高い剣の才能を持っており、魔術師として成長する主人公と同じようなスピードで強くなっていきます。
シルフィと同じように、主人公を自分に出来ないことができるスーパーマンとして見ますが、その心情はシルフィと真逆です。
主人公を守ってやろう、並び立って一緒に戦おう、という強い意思を持っているのです。
主人公にとってエリスとは自分を守ってくれる存在であり、彼女に認められるという事が力の証明となります。

主人公と同じ方向を向いて後を追うシルフィと、真逆の方向を向いて主人公を追うエリス。
そして、主人公の先にいるロキシー……。

それが、無職転生ヒロインズの初期コンセプトになります。

あくまでコンセプトであり、実際に書いてみると想定と違う感じになってしまった部分もありますが、そういうものがあったんだなという事を念頭に置きつつこれからのお話を読んでいくと、より楽しめるかもしれません。
WEB 版を読んでしまった、という方は「へぇ、こういうコンセプトがあったのにああなったのかー」と思いつつ、創作のままならなさについて想いを馳せてみたりしてください（笑）

では、以上です。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 3』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

3巻からの方は(さすがにいないと思いますが)はじめまして。
1巻からの方はありがとうございます。
WEB 版の方から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。
理不尽な孫の手です。

このコーナーはこぼれ話という事で、1巻の時は物語自体の誕生秘話、2巻の時にはヒロインの誕生秘話について書きました。
なので、3巻でもやっぱり誕生秘話について書こうかと思います。
今回は、主人公の師匠役の人物について書いていきましょう。

・師匠という存在
1巻、2巻を読んだ方はわかるかと思いますが、主人公には常に師匠役の人物がいます。
すでに無詠唱魔術を扱い、魔力もたっぷり、一般人より明らかに強い主人公ですが、彼を肉体的、あるいは精神的に導く存在がいます。
ロキシー・ミグルディアしかり、パウロ・グレイラットしかり、ギレーヌ・デドルディアしかりです。
そして、3巻で登場したルイジェルド・スペルディアというキャラクターもまた、師匠役の人物の一人となります。

・師匠役の必要性
なぜこうした師匠が必要なのか。
一つは「異世界」という世界に現実味を持たせるためです。
「異世界転生」というジャンルでは、と言葉にあらわしてみると、非現実的なことこの上ありません。
それも、主人公は魔術の才能があり、一人でどんどん強くなってしまう。
こんな簡単に物語が進むのか、ご都合主義すぎませんか、と思った時に必要なのが主人公を押さえつける存在です。

ゲームの世界であるならば、主人公より強い存在はいません。
格闘ゲームや FPS、MMORPG といったゲームならまだしも、一人でプレイするRPG では最終的には主人公が一番強くなってしまいます。
しかしながら、現実ではそうなる事はほとんどありません。
常に上がいて、その上にはさらに上がいる。
そして、目に見える上というのは「目標」となります。
そのためにも、「主人公より上の存在」は必要なのです。

・ナビゲート役としての役割

また、異世界ものを一人称、ということで、いわゆるナビゲート役というものも必要となってきます。
ナビゲート役は主人公が見たものを説明してくれる係であり、読者を安心させるための保護者ともなります。
一部の RPG において、序盤から仲間に入るわりにやたら強いけど、途中でパーティから離脱してしまうタイプのキャラを思い出していただければわかるかと思います。
守られている間に強くなる。
しかし、ずっとそんなキャラが交代で出てきて守られてばかりでは、面白くはありませんよね。
というわけで、無職転生の師匠役の人物には、ひと味加えてあります。

師匠役の変化
一巻ではロキシーとパウロ。二巻ではギレーヌ。
そして三巻ではルイジェルド・スペルディアというキャラが師匠役として登場します。
本作を読んだ方はわかると思うのですが、師匠役の人々はそれぞれ弱みを持っています。
やや鼻持ちならない自信家であったロキシー。
父親だけど人間的にまだまだ未熟なパウロ。
剣術の達人だけど頭の回転は鈍いギレーヌ。
彼等は主人公と触れ合うことで、変化していきます。
パウロは主人公と触れ合う事で人間的に成長し、ギレーヌは勉強ができるようになり、ロキシーは神となりました。

ルイジェルド・スペルディアが今後、どのように変化していくのか。
また、彼と触れ合う事で、主人公がどう変化していくのか。
主人公は、彼等を超えることはできるのか。
という部分に焦点を当てて読むと、書籍版の読者さんも WEB 版の読者さんも楽しめるかもしれません。

では、以上です。

『無職転生 〜異世界行ったら本気だす〜 4』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

皆さんこんにちは。
流石に四巻からという人はそうそういないでしょうが、いると仮定して初めましての方は初めまして。
理不尽な孫の手です。

四巻は、これからルーデウスの冒険を助けていく魔眼、世界的有名人であるキシリカの登場、ギャンブル好きの冒険者ギースや、獣族たちの村と、無職転生のファンタジーっぽさ、世界観がたっぷりと詰まった巻となっております。
また、港町での出来事や大森林での戦いと、今回は多めに加筆修正されており、すでに WEB 版を読んだ方も楽しんでいただけたのではないかと思います。

さて、今回もキャラクターについての裏設定というか、解説のようなものを書いていこうと思います。

・魔界大帝キシリカ・キシリス
まずはとても偉そうな幼女、キシリカについて語って行こうかと思います。
魔界大帝キシリカ・キシリス。
4巻、あるいは WEB 版を読んだ方はご存知かと思いますが、彼女はアホです。
この物語に登場する人々の中で、五本の指に入るほどのアホです。
ちなみに五本の指に入っている人たちの大半は魔王です。
魔大陸の王様はみんな頭が可哀想なのです。
そんな彼女は、事あるごとに登場し、飯を献上すると助けてくれる、お助けキャラ的なポジションです。
「誰も正体を知らない謎のお助け幼女」ですね。まあ、正体は隠していないのですし、無職転生にもそんなに出てこないのですが……。
あの世界における彼女の役割というのは、そういったものです。
物語の見えていない場所でババーンと登場して、知恵とか勇気とか魔眼とかを与えて去っていく、そういうキャラですね。
無職転生に出てきていない部分で、4巻のルーデウスとキシリカの邂逅のような出来事が、たくさん行われているのです。

・魔族はどうしてこんなにアホなのか。
第一に人族との対比を出したかった、というのがあります。
2巻でボレアス家の後継者争いについての話を読んだ方はなんとなく察しているかと思いますが、人族の、特に貴族の人間関係ってのはドロドロギスギスしています。

3巻、4巻の番外編においてアスラ王国の王宮での話もやっておりますが、王族ともなれば暗殺が日常茶飯事という、その場にいるだけで疲れるような世界です。
でも魔族はそうじゃない。トップは馬鹿で、謀略をする頭なんて無くて、みんな自分の好き勝手に生きている。
もちろん血なまぐさい事もあるけど、基本的にはサラッとしている体育会系の世界。
そういう対比ですね。
もしかすると、相手を蹴落とすのが当然とされている今の社会に疲れている人は、魔大陸の社会が魅力的に映るかもしれません。

・ギース
さすらいのギャンブラー。ジンクスの男。その名はギース。
このキャラはもっと冒険者らしい冒険者を、という観点で作り出されました。
冒険者として必要な事はなんでも出来る、気配りも出来る、パーティのマネジメントも出来る。1パーティに一人は欲しい男、それがギース。
けど戦闘力は皆無なので、周囲から爪弾きにされていまいます。なにせ、無職転生における冒険者パーティは7人までしか入れませんからね。
非常に有能な男なので、やろうと思えばいくらでも冒険者として活動出来るのですが……そうしないのはジンクスです。
そんなギースというキャラクターがなぜ唐突に4巻で出てきたのか、何を企んでいるのか。
というのは、5巻で明らかになります。
乞うご期待。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 5』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

皆さんこんにちは。
5 巻まで読んだのに初めましてという方はいないと思いますが……。
5 巻を楽しむには、1巻での出来事をリフレインして頂く必要があるので、是非1巻から読んで見てください。
あ、申し遅れました。
初めまして、理不尽な孫の手です。

5 巻は、無職転生の主旨の一つでもある『前世のやり直し』や『家族との和解』がメインテーマとなったお話です。
数年ぶりに出会った親子が、それぞれの苦悩を不器用にぶつけあい、ぶつかり合い、後悔し、反省し、歩み寄り、許し合い、和解する。
そんなお話です。

普通だったら、こんな綺麗に仲直りしたりは出来ないものですが、そこは家族とぶつかり合うのは二度目のルーデウス氏という事で、不器用なりに頑張って動いてくれます。
コミュニケーションは互いの努力。
だから二人が頑張れば、必ず落ち着く所に落ち着く……。
というのは、あくまで私の願望ですが、説得力のある内容になっていたのではないかと思います。

さて、今回もキャラクターの話をしていきましょう。
今回はルーデウスのパパ。
パウロ・グレイラットについてお話していきましょう。

・父親という存在
パウロは当初、父親として誕生しました。
転生系の小説によくいる、普通の父親です。
剣術は一流で、強くて、可愛い奥さんを持っていて、村で一番頼りにされている騎士。
普段はちょっと情けない所もあるけど、いざという時には主人公を叱ってくれたり、かっこいい所を見せてくれる頼れる親父。

でも、書いている時に思いました。
あれ、パウロってまだ若いよな、と。

『無職転生』の世界、特にアスラ王国では成人は「15 歳」と定められています。
国によって違う所もあるのですが、基本的に人族は 15 歳前後で成人します。

15 歳前後で成人を迎えていた昔の日本では、20 歳を過ぎると年増・行き遅れなんて言われていたそうです。
もちろん、中には 20 歳をずっと過ぎてから結婚した人もいるでしょう。
でも、大半は 10 代中盤から後半に掛けて結婚し、20 歳までに出産したのではないないか。
その時代には、それが「平凡」だったのではないか。
ルーデウスの生まれてくる家庭は、平凡な家庭であるべきだ、と私は考えていました。
なぜなら、彼の前世の家がそんな家庭だったからです。
凄く裕福ではないけど、ことさらに貧乏でもなく余裕はあって、子供を四人養える家。
中流階級か、平均よりちょっと上ぐらいの家。
その世界における平凡だからこそ、彼は家の事を言い訳にせず「やり直す」ことができるのだ。

でも、平凡だとすると、パウロは若いはず、20 歳そこそこなはず。
この現代日本においても、20 代前半といえば、色々と不安定な時期です。
周囲の 20 代前半の若者達を見てみてください。
高校生かと思うほど考えたらずで、行動や言動が幼稚な奴。
実は 30 代なんじゃないかと思えるほど大人びた奴。
いろんなのがいると思います。

もっとも、パウロは仮にも結婚して子供も作り、従兄弟に頭を下げて、家と仕事ももらった。
子育てをする覚悟のようなものは決めている男です。
というわけで誕生したのが「良い父親であろうとしている普通の若者」。
パウロ・グレイラットです。
彼は偉大でもなんでもなく、父親としての威厳もなく、己の欲望に忠実で、子育てといっても右も左もわからない、どこにでもいる若者なのです。

・パウロとルーデウス
さて、そんな初心者パパが最初に授かった子供、それがルーデウスです。
ルーデウスは前世において、34 歳であるにも関わらず、分別もなにもついていないクズニートでした。
とはいえ、彼も 34 年間を生きてきた経験から、「どうすれば賢く生きていけるか」を考え、努力しながら育っていきます。
20 年近くもニートとして生きてきた奴……でも 3 歳です。
3 歳児が、34 歳児の思考能力を持って、行動し、発言するのです。

パウロの父親としての予定は、大きく狂ってしまいます。

厳格な父親であろう、立派な父親であろうと思ったパウロは、事ある毎に失敗します。
偏見で子供を怒鳴りつけ、殴ったり。
自分の欲望に負けて浮気をしてしまったり。
そうしてルーデウスに助けられ、気付かせられ、父親としての威厳を失っていきます。

でも、成長していきます。
人として、父親として。
少しずつ、「大人」へ、いい父親へと近づいて行くのです。
そしてまたルーデウスも、成長するパウロと接する事で前世の事を思い出し、悔恨し、省みて、成長していくのです。

今後、ルーデウスにとってパウロがどういう存在になっていくのか。
そして、パウロという存在によってルーデウスがどう変わっていくのか。
お楽しみにしていてください。
WEB 版既読の人はネタバレしないようにお口にチャックで。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 6』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

皆さんこんにちは。
理不尽な孫の手です。

『無職転生』も六巻となりました。
実を言うと、もし書籍になったら、最低でもここまでは出したいと思っていたラインが、六巻でした。六巻まで出せたら打ち切りでもいいや、次を頑張ろう、ぐらいに思っていたのですが、なんとか七巻以降も出させて頂けるようです。
それもこれも皆様のお陰です。ありがとうございます。
さて、六巻では二巻の最後に起きた転移事件が一応ながらの結末を迎え、同時にルーデウスの少年期も終わり、肉体的にも精神的にも次のステップへと以降します。

物語としての区切りの一つです。
というわけで、ここで無職転生の『少年期』を振り返ってみようと思います。

・二巻
幼年期（一巻）が終わり、少年期が始まります。
七歳となったルーデウスは、新たなるステージとしてフィットア領の城塞都市ロアへと向かいます。
そこで行うのは出来の悪い生徒への家庭教師です。
自己の鍛錬や、過去からの脱却を主軸をおいた一巻から、自分が学んだことを他人に教えることを主軸においた二巻へ、さらに三巻以降のメインキャラクターであるエリスがどういう人物で、ルーデウスがどう仲良くなったのか、という事を掘り下げる巻となります。

・三巻
転移事件が起こり、ルーデウスは魔大陸へと飛ばされます。
そこで出会ったのが、一族の名誉回復を願いつつ旅をしている戦士ルイジェルド。
彼に助けられつつ、アスラ王国へと帰るための大冒険が始まる……というわけではありません。
金も何もない状態からのスタート。始めるのは小銭稼ぎです。あくまでも現実的な一歩からです。
人としては現実的でありながら、しかし冒険者としての第一歩は、一巻と二巻で学んだ事を大いに活用して飛ばしつつ、ルーデウスは冒険者として歩み始める話となります。

・四巻～五巻
四巻から五巻は、冒険を楽しんでいたルーデウスが、現実に引き戻される話です。
ルイジェルドやエリスと親交を深め、冒険者という職業を楽しみながら、ゆるやかに目的地へと移動していくルーデウス。道中では紆余曲折ありつつも、無防備なエリスの姿に我慢できなく

なったり、無防備な幼女におさわりしたり、それが原因で牢屋に入れられたりと、楽しいイベントが盛りだくさんで、頑張っているつもりでもどこか余裕のあったルーデウス。
そんな彼は、五巻においてパウロと再会し、ルーデウスは転移事件というイベントを楽しんでしまっていた事に気づきます。
ここで、主人公はまた一つ大人になり、またこの世界の住人としての自覚のようなものを持ち始めるようになります。

六巻
そして、六巻。
六巻では、三巻の時に設定した目標である中央大陸、そしてフィットア領へと到着します。
そこで、ルーデウスは初めて、自分の周囲で何が起こったのかということを目の当たりにします。
一巻の時のような生活に戻ることは出来ない。
これからは何を目指していけばいいのか、まったく思いつかないが、でも今までエリスと一緒にやってきた。今まで通り彼女を助け頑張っていこう、と結論つけます。
しかし、それもほんのちょっとした意思疎通の齟齬から、結局はエリスと別れる事になってしまいます。
傷心のルーデウスは、この世界にきて初めて「一人」になってしまうのです。

無職転生を書き始めた頃「主人公は、章が変わると違う場所に行き、今までと違う立ち位置で、違う事をする」というのを念頭に置いて書こうと考えていました。
そうすることで、物語にメリハリが出ると思ったからです。
ゆえに当初、三章から六章はひとつの章でまとめてしまおう、一巻分の長さでやってしまおう……と考えていたのですが、私の力量不足もあって、これほどの長さになってしまいました。

ともあれ六巻でエリスの家庭教師であり保護者という立場は終わり、七巻からはまた別の立ち位置の人間として動き始めます。
六巻までにあった様々な困難を乗り越え、時には挫折しかけて知り合いに助けてもらったルーデウス。
成長したような、成長していないような、三歩進んで二歩下がるような、ゆっくりとした成長をしていく彼が、次にどんな立ち位置の人間になり、どんな活躍をするのか。
楽しみにお待ちください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 7』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

七巻だけを購入した人は、はじめまして。
そうでない方はお久しぶりです。
半年ぶりの理不尽な孫の手です。

今回は七巻のことについてつらつらと書いていこうかと思います。
少々のネタバレが含まれるので、未読の方はまず本編を御覧ください。

七巻はエリスと別れてからの数年間の話になります。
WEB 版ではやらなかった部分ですね。
エリスに捨てられたと思い込み落ち込んだルーデウスが、なんとかそれを忘れて頑張ろうと苦悩しているうちに、例の病気が発覚する。
そんなお話です。

さて、今回もキャラクターの話をしていきましょう。
今回はサラ、スザンヌ、ゾルダートについて設定や解説的なものを語っていこうと思います。

・サラ
彼女は七巻のオリジナルキャラになります。
名前は作中に登場するサクラに似た木『サラーク』から。
サラークは山にしか生えない木です。無職転生の山には赤竜がいるため、貴重な木ですね。
アスラ王国では赤竜に襲われないギリギリの位置に村を作り、そこでサラークを栽培しています。
彼女はそんな村の出身……という設定です。

彼女は『ルーデウスが好きにならない人物』として作られました。
サラには、目立った弱さがありません。
才能があることを鼻にかけている、という欠点は持っていますが、心の弱さというものは持ちあわせていない、強い人間です。
なのでルーデウスの辛さを理解できず、ルーデウスもサラの考えが理解できません。
辛い時のルーデウスを助けてやることが出来ないのです。

だからもし作中でルーデウスが病気になっておらず、そのまま最後まで致してしまったとしても最終的にはサラとルーデウスは別れてしまったことでしょう。
そう書くと、ちょっと可哀想ですね。

でも、サラはルーデウスじゃなくてもいいし、ルーデウスもサラじゃなくてもいいのです。

彼女は今回、苦い思い出を残しました。

以後、それを糧に次の出会いでの経験としていくでしょう。

というのがサラというキャラクターになります。

・スザンヌ
彼女は WEB 版にも少しだけ登場しました。
その大きなおっぱいを使って、ルーデウスの○○のお世話をしてくれたキャラですね。
ネタバレになるので伏せ字ですが、特にえっちい意味はありません。

彼女は、パウロ、ギレーヌ、ルイジェルドに続く、第四の教導役として作られました。
とはいえ彼らと違い、ルーデウスにべったり、というわけではありません。

世話好きの彼女は、ルーデウスをひと目みて、なんとかしてやらないと、と思います。
とはいえ、彼女もルーデウスの辛さがわかるわけではありません。
彼女に出来るのは、グイグイと引っ張って冒険者として活動させ、忙しさで気を紛らわせる。
というだけです。脳筋の理論ですね。
しかし、実際ルーデウスはその行動で、とりあえず持ち直す事が出来ました。

本来ならパーティに入れて面倒を見てやる彼女ですが、ルーデウスはパーティには入らない。
じゃあもう一人でも大丈夫かというと、落ち込んだまま。
ということで、その後も彼の事を気にかけてくれます。

どこの集団にも、内気で輪にはいっていけない人物を見かねて、遊びに誘ってくれる人がいるかと思います。
スザンヌはそういうキャラクターです。

・ゾルダート
そしてゾルダートです。
彼も WEB 版に少し登場しました。
エリナリーゼに食べられてしまった哀れな冒険者の一人ですね。

七巻では S 級冒険者パーティのリーダーとして登場します。
剣士として優秀で、自分に自身があって堂々としているため、非常に頼りがいのある存在です。
反面、強引な所も目立ち、少しでも気に食わないことがあると苛立ちを隠しません。
いわゆるオラオラ系ですね。
ガキ大将がそのまま大きくなったような感じで、コンセプトとしてはパウロと非常によく似たキャラクターになりました。
違うのは、パウロより女に対して節操を持っているという所でしょう。

さて、そんな彼は、ルーデウスに対して嫌悪感を顕著にします。
彼にとって、自分をさらけ出して正直に生きるというのは、絶対的に正しい生き方です。
なので、自分を隠し、チラチラと周囲を見て愛想笑いを浮かべながら行動しているルーデウスの行動は、間違っているものになってしまうのです。
見ているだけで苛立ってしまうので、彼はルーデウスに辛くあたります。
彼の言いたいことは簡単で、男ならもっと自信を持って堂々とやりたいことをやれよ、という感じです。

さて、そんな彼ですが、頼ってきた相手は守ってやろうという、男らしい一面も持っています。
ルーデウスが追い詰められて泣きだした時、親身になって助けてくれたのは、そうした一面からくるものなのです。

口は悪いし暴力的、だけど根は面倒見がよい兄貴分。
ゾルダートとは、そういうキャラクターになります。

さて、次の巻では、今まで別に進行していた物語とルーデウスの物語が交差します。
それと同時にルーデウスを助けてあげられるキャラも登場します。
ご期待ください。
WEB 版既読の人はネタバレしないようにお口にチャックで。
これからもよろしくお願いします

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 8』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

皆さんこんにちは、理不尽な孫の手です。『無職転生』も八巻までやってまいりました。ルーデウスも成長してきて、物語の中盤に差し掛かってきます。色んなものを失ってしまったルーデウスが、魔法大学という舞台において、また色んなものを手に入れ始めます。何を手に入れるかは、本編でのお楽しみということで。さて、今回も八巻で登場したキャラクターの誕生秘話についてお話しようかと思います。ジュリエットと、リニア、プルセナです。

・ジュリエット
ザノバの手足となって働く奴隷の女の子です。

実をいうと彼女は、初期の構想にはいない人物でした。
というのも、初期構想におけるザノバ・シーローンという人物に『怪力の神子』という特性が無かったからです。
ザノバは手先が器用で無愛想な人形師で、主人公が土魔術で作った人形に興味を示して、自分の作品に反映させていく、そんな人物でした。
それがあんな人物になったのは主人公がオタクであったことが影響しているのですが、それはさておき、とにかく初期構想と今とでは人形大好きということぐらいしか残っていません。
『怪力の神子』という特性を考えた時、ザノバを器用な人物にするのは不可能でした。彼は力の振り幅が大きすぎて、繊細な作業は不可能なのです。
でも彼は人形を作りたい、どうするか、王族なら人を使う、そんな人物はいない、じゃあどこから連れてくる？ 雇う、でもルーデウスの人形制作には無詠唱魔術と高い魔力が必須、その二つは幼い頃から鍛えないと出来ない、なら幼くて適正のある子をどこかからか拾ってくるしかない。という流れと、あとは奴隷市場で真面目に買い物をする話をミックスさせた結果、生まれたのがジュリです。
そんな彼女、八巻では幼くて、土魔術もまだまだ覚え始めたばかりですが、次第に成長してザノバとツーカーな仲になっていきます。乞うご期待です。

・リニア、プルセナ
不良の獣族の女の子のコンビで、いつも仲良く喧嘩している二人です。
この二人の内、リニアの方は初期構想から見て、あまり大きく変わっていません。
攻撃魔術が得意で、攻撃的で、いつも調子に乗ってにゃーにゃー言ってて昼寝が大好き。変化といえば不良っぽくなったことぐらいですね。対するプルセナは大きく変わりました。
初期構想ですと、回復魔術が得意で、いつもおどおどして自己主張ができず、リニアの後ろでもじもじしながらうつむいている、けど意見は常に的確で賢い、そんなキャラでした。
リニアと真逆のキャラですね。
しかし、不良となったリニアとのコンビがおどおど系ではダメだと思い、少しずつ今の形に変えていきました。

大型犬のように泰然としているけど、リニアと同じぐらい馬鹿だしプライドは高い。でも犬なので肉を見せられると尻尾を振るし、懐いた相手には気安い。
そもそもあまり吠えないタイプなので、口汚くはなく、キメ台詞は「ファックなの」。

作者が自分で言うのもなんですが、良いキャラに仕上がったと思います。
次巻ではクリフやサイレントといったキャラも出てきますが、彼らの設定に関しては次の機会ということで。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 9』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

皆さんこんにちは、理不尽な孫の手です。
無職転生も9巻までやってまいりました。
7巻から続くルーデウスの病気が治るお話です。
そしてフィッツ先輩の正体が明かされる巻でもあります。
まあ、大方の人は予想がついていたでしょうが、あの人です。多分いないと思いますが、もしこのこぼれ話を本編を読む前に読む人がいたら注意して欲しいのですが、今回のこぼれ話はその人についてのことです。ネタバレを含みますので、お手数ですが本編の方からお願いします。

さて、今回は8巻、9巻における流れの初期プロットについてお話しようかと思います。
つまり、シルフィと再会し、結ばれるまでのストーリーです。

・初期プロットとの大きな違い
無職転生には家族・家庭を作る、といったテーマが盛り込まれています。
前世において、ルーデウスは家族を邪魔者の如く扱い、あのような結果になりました。
ゆえに、『やり直す』としたら、家族との良好な関係を築くことは絶対になります。
嫌なこと、苦手なことから目を反らして、幸せになれるわけもありませんからね。
ですが、最初期の構想段階からそれがメインテーマだったかというと、そういうわけではありません。最初期、それこそ書き始める前段階の構想だと、元無職のニートが異世界でヒャッホーと好き放題暴れまわるだけの話でした。
当然、ルーデウスはもちろん、ずっとクズのままでした。

・エリスとの関係、シルフィとの関係
最初期の構想でも、6巻までの流れは変わりませんでした。
転移事件に巻き込まれて、エリスと一緒に旅をして帰ってきて、結ばれる。
しかし、最初期の構想だと、そもそもエリスが何も言わずに立ち去る、ということはありませんでした。
ルーデウスとエリスはオルステッドに敗北したことで力不足を感じ、エリスは剣の聖地へ、ルーデウスは魔法大学へ、それぞれ駒を進めます。
そして、ルーデウスはそこでシルフィと出会います。
久しぶりに出会った幼なじみ。将来の約束までしていた彼女は、再会した時には美少女に変わっていました。
もちろんシルフィは正体をすぐに明かし、ルーデウスにアタックを開始します。
クズなルーデウスはどうするか。
もちろん浮気します。当然のように。
そして、満を持して剣の聖地から帰ってきたエリスと一悶着……。

という流れでした。
今考えると、ルーデウスはクズですが、流れとしてはスタンダードですね。
それはそれで面白い話になったかもしれませんが、今の無職転生が好きな人からすると、
ちょっと受け入れがたい話だったかもしれませんね。

・現在の流れへ
しかし、その『家族』をメインテーマにするとなると、やっぱりダメですよね。
その他にも、シルフィが魔法大学にいる必然的な流れも考えなければならず、シルフィがすぐに正体を明かしてしまうと、その瞬間からシルフィのストーリーが始まってしまい、ナナホシやザノバ、クリフ、犬猫といったサブキャラが絡んでくる余裕が無くなる……。
と、様々な葛藤の結果、今のような形になっていきました。
反省点は多いですが、個人的には気に入っている流れです。

さて、9巻ではルーデウスとシルフィは結ばれました。
しかし、もちろんこれでヒロインは決定、他のキャラに余地は無い……。
というわけではありません。今後にエリスとの一悶着はありますし、他のヒロインとの絡みも残っています。
そのあたりは、今後にご期待ください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 10』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

皆さんこんにちは、理不尽な孫の手です。
無職転生も十巻までやってまいりました。
十巻です。二桁です。大台です。
正直なところを書かせていただくと、私としてはこんな巻まで出せるとは思っていませんでした。
物語が一区切りつく六巻あたりまで出せれば上出来かな～、ぐらいに思っていました。WEB 版を書籍化するという話を受けたのも、丁度その頃でしたし、当時は WEB 版を完結させられるなど、まったく思っていなかったのです。
それが、いつしか WEB 版は完結し、書籍版は十巻。
世の中何が起こるかわからない……と言ってしまうのはいけませんね。全てはWEB 版を応援してくれたり、書籍を買ってくださった読者の皆様のお陰だと思います。
本当にありがとうございました。

さて、今回のこぼれ話では、(新規のキャラクターがいないこともあり)十巻内のエピソードについて語っていこうかと思います。
※ネタバレを含みますので、まだ読んでいない人は本文からどうぞ。

・『結婚の前に用意するモノ 前編 後編』
家を購入するお話です。
二巻のラストで生家を失い、その後ずっと根無し草だったルーデウスが、結婚を機に、自分のベースとなる場所を構築する。それが結婚であり、家の購入であります。
生きていくための場所を確保するというのは、生きる上で大切なことですからね。
さて、このお話ですが、ヒロインであるシルフィを登場させない形にしました。
ザノバとクリフ。この二人に相談し、一緒に家を見てもらい、家の中を探索し、肝試しのように一晩を過ごして、問題を排除する。その結果、二人はルーデウスともっと身近な人間になり、最終的には終生の友となっていく……か、どうかは今後の話を見て頂ければと思います。

・『披露宴 準備 開催 終了』
披露宴。いわゆる結婚式ですね。
この手の話を書くにあたって、私の中に一つルールがありました。
物語においては蛇足となりうるシーンでも、ルーデウスの人生においては大事なシーンだから、絶対に端折ってはいけない、というものです。
この披露宴も、その内の一つですね。

披露宴では、ルーデウスが魔法大学で作り上げてきた人間関係の結果を出そうと努力しました。

ザノバ、ジュリ、リニア、プルセナ、クリフ、アリエル、ナナホシ、バーディガーディといった面々が、ルーデウスの結婚を祝ってくれる。積み重ねてきたものが、彼の人生を幸せにしてくれる……か、どうかはまだわからない所ではありますが、ともあれ、書籍版では結婚を決意するまでの流れがより自然な形になっているかと思います。もしWEB版を読んでいる方は、そのあたりを比べてみてください。

・『決壊 文殊の知恵』
こちらは無職転生のヒロインの中でも、特にヒロイックなナナホシの話です。
実をいうと、無職転生には「ただの女子高生が異世界に行って、元の帰るために魔法学校でドタバタコメディをする話」という、元になる話が存在します。完成しませんでしたが。
ナナホシはその主人公で、ルーデウスは唯一の常識人で、もちろん転生者ではなく、あの世界における普通に魔術が上手な少年という立ち位置で、ルーデウスは異世界からやってきた少女のとんでも発言を聞きつつ、それを叶えていく苦労人……
言ってみれば某レーベルのハoヒとキoンみたいな感じでした。
それが今の関係になったのは、ルーデウスが転生者という要素を持っていたからです。
帰りたいナナホシと、帰りたくないルーデウス。
ナナホシは今まで、この世界の人間を人間と思っていませんでしたが、ルーデウスと出会ったことで、少し考えを改める結果になりました。
今後、二人の関係がどうなるかは、ナナホシが周囲に対する態度をどう変えていくのか……。
それは今後のお楽しみということで。

というところで、今回のこぼれ話はおしまいです。
ありがとうございました。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 11』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

皆様 こんにちは、理不尽な孫の手です。
無職転生も十一巻までやってまいりました。
それもこれも皆様のお陰、本当にありがとうございます。

今回の巻は、ノルンと接することで前世のトラウマの一つと決着をつけるパートと、父親の援軍要請に応えてベガリット大陸へと旅するパートの二つになります。もしかすると「後半は旅するばっかりでおもんない！ もっとキャラ同士の掛け合いを！ 人間関係を！」と思われる方もいるかもしれませんが、個人的にベガリット大陸を旅するパートは気に入っています。
私自身、ファンタジー世界で冒険するゲームや小説を読む時、砂漠のステージになるとあまり面白いとは思わないのですが、実際に「この世界における砂漠ってどんな感じなんだろう。どんな魔物がいて、どんな人々が住んでいるのだろう？」と思いながら書くのは大変楽しく、興味深く、得難い経験になりました。
分量的に多くはなりましたが、パウロたちが遠い場所にいて、簡単には行き来できない、というのがよく分かる形になったのではないかと思います。
さて、今回のこぼれ話では、ノルンとアイシャの話の解説に加え、今巻・次巻の舞台となるベガリット大陸のプロトタイプや裏話的なことを書いていこうと思います。
※ネタバレを含みますので、まだ読んでいない人は本文からどうぞ。

・ノルンというキャラクター
ノルンとアイシャは、「妹」というキャラクターを作ろうと決めた時、『兄のことが嫌いでツンツンしている妹』と『兄のことが大好きでいつも笑顔の妹』のどちらにしようかと迷いました。そして「迷うならどっちも出せばいいじゃん」という結論から生まれたのが、ノルンとアイシャになります。
二人を描写するにあたって気をつけたのは、出来る限り正反対にする、ということです。
何もできないノルンに、何でもできるアイシャ。
潔癖で頑固なノルンに、大らかで適当なアイシャ。
凡才のノルンに、天才のアイシャ。
結果として、ノルンは何も出来ないくせに兄に噛み付き、理屈の通らないワガママばかりを言う……と、とても受け入れがたいキャラになってしまったかと思います。
しかしながら、ここでルーデウスというキャラが生きてきます。
ノルンはダメな子だ。でも俺はもっとダメだった。ルーデウスはノルンと接することで前世を思い出し、自分を見直し、成長することが出来ます。
そして、ノルンもまた、ルーデウスが辛抱強く見守ってくれることで、不貞腐れたり泣きそうになったりしながらも、少しずつ少しずつ成長していくのです。
なのでルーデウスとノルンの関係は、正しく整った感じの兄と妹として書けたのではないかと、個人的には思っています。
ではアイシャはというと……これはノーコメントとしておきましょう。

・ベガリット大陸
作中では砂漠風景がどこまでも広がるド田舎という感じですが、初期構想では、この大陸はもうちょっと栄えていました。
最初の構想では砂漠ではなく山ばかりで、中央大陸とは違う浅黒い肌を持つ人々が傭兵国家を作り、中央大陸で戦争をする各国に兵士を派遣し、その金で国を維持しているという設定でした。山には魔物が多いため、傭兵たちは生まれた時から魔物との戦いを学び、成長したら傭兵団の一員となって、中央大陸で戦うのです。バリバドムたち砂漠の民は、その設定の名残ですね。
しかし、海族がいるから海を簡単には渡れない、という設定が後から追加されたことにより、傭兵国家という設定は困難になりました。各地に派兵するには巨大な船団を持っていなければいけませんが、海を自由に渡れないため、その存在が困難になったからです。
なので、今の設定へと変わっていきました。
ただ、海族が海を支配しているから人族は海を自由に移動できない、というのはあくまで今の時代の設定です。
無職転生の別の時代の話を書く機会があれば、もしかすると沿岸部に存在する傭兵国家を書くことがあるかもしれませんね。

今回は、ノルンと和解し、過酷なベガリット大陸を旅し、父親の元に馳せ参じました。
この後にどうなるのか、はたして母親は救えるのか。
それは、次巻のお楽しみということで。

というところで、今回のこぼれ話はおしまいです。
ありがとうございました。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 12』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

どうもご無沙汰しております、理不尽な孫の手です。
無職転生も一二巻までやってまいりました。
それもこれも皆様のお陰でございます。ありがとうございます。
さて、一二巻、いかがだったでしょうか。まだ読んでいらっしゃらないという方は、こんなあとがきもどきなんか読んでいないで、先に読んできてください。私はネタバレしますので。

この一二巻は私にとってとても思い入れの深いエピソードになります。
二巻から続く転移事件に完全にケリが付く話で、無職転生全体のちょうど半分。
とても区切りのいい話……というのもありますが、それとは別に。
無職転生は『小説家になろう』というサイトにおいて、総合累計ランキング一位（2016 年 7 月現在）を取らせて頂いております。とはいえ、もちろん一章を書き始めた瞬間から一位だったわけではありません。ランキング圏外から、少しずつランキングを登らせて頂きました。

それでは一位になったのはいつなのか。
というのが、まさに一二巻相当の話を書いていた時なのです。
私は普段から、あまり数字というものを気にしないようにと努めています。数字を気にしだすと、数字の増減や、他者との比較ばかりに目が行き、その数字の中身……なろうのランキングポイントであれば、そのポイントを入れてくれた人はこの物語のどこを気に入ってくれたのか、どこを面白いと思い、どんな風に期待してくれているのか、といった本当に大切なものを見失ってしまうからです。
私は創作というのは比べるものではないと思っています。もちろん、多くの作品を見比べて、どれが一番だと決める遊びが楽しいことは知っています。私もよくやります。しかしながら、あくまで読書というのは読者と作品が一対一で存在しているものだと思うのです。

読者が作品を読みどう思ったのか、どこで興奮して、どこで冷めて、どこで考えさせられて、どこで無心になって、どこで息をついたのか。それが一番重要であって、その作品がどれだけ多くの人に好かれているかというのは、二の次だと思っているのです。

書く側であっても、自分の物語がいかに他の作品より優れているかに思考をとられるより、自分の作品をいかに自分の理想に近づけていくか、どう書けば自分の面白いものが読者に伝わるか、そんな事を考える方がよっぽど重要だと思っているのです。

と、そんなご立派な理論を普段から偉そうに口にしていた私ですが、流石に累計一位を取った時は興奮しました。

一位を取った時は内容的にはなんてことのない、迷宮を探索している話だったのですが、その後の戦いや喪失、復活、エピローグでポイントは増加し、その後もずっと累計ランキング一位の座に座らせていただいております。
まあ、過去の栄光です。いつまでも一位とかそういう数字を気にしていないで、次の話を書いた方がいいでしょう。

さて、作品内容の話をしましょう。
今回のお話は迷宮探索と、そして迷宮探索後の話の2パートがメインになっております。
前半は……まあ特に語るべき所もないですね。普通の迷宮探索物語です。攻略本を頼りに迷宮の深部へと潜っていく。難所もあるけど、知恵と勇気で解決と。なろうで流行していた迷宮探索ものを無職転生でやったらどんな感じになるのか、という具合にうまいことまとまっていると思います。
問題は後半。ヒュドラとの戦いで死んだパウロ、そして、立ち直れないほどに落ち込むルーデウス、そしてそんなルーデウスを立ち直らせるために体を張るロキシー、そして色々ともつれた結果……と。

この結末に関しては、WEB版でも賛否両論となりました。
未だに、「こうする必要は無かったんじゃないの？」と言われることもあります。
私としても後になって、もっと上手に書けたかもしれない、と思った事はあります。

現在、もし直すとしたら、それは可能でしょう。
より心の痛くない方向へ、ルーデウスも落ち込みはすれども自力で立ち直り、ロキシーも慰めはすれども一線は超えず、互いに綺麗に大人な対応を見せて、綺麗な結末に……そんな風に改変することもできるでしょう。でも私はそれはやってはいけない事だと思います。
ルーデウスの人生はWEBですでに書かれたのです。
人生には選択があります。でも、選択の中に正解があるとは限りません。どっちを選んでも最悪な方向に進まざるを得ないこともあるかと思います。
とはいえ、最悪な方向に進んだとしても、芽がまったく無いわけではないのです。自分の努力で、あるいは周囲の助けで、いくらでも立ち直ることは出来るのです。

今回のルーデウスとロキシーの関係、そしてシルフィの選択は、そんな私の思想から来ています。
なので、ほぼWEB版で賛否両論だった形のまま（細かい所は修正してありますが）、出させていただきました。
もし今回の展開に納得できないとか、必要ないとか、一気にダメになったとか、もう続きは読まないとか、そういうことを思った方もいるかとは思います。
そういう方に「今回はダメだったかもしれないけど、今後は面白くなるから続きを読んでくれ」と言うことは簡単ですが、言いません。
ですがもし、人生において正解の存在しない出来事に直面したとき、あるいは誰かが直面しているとわかった時、今回のエピソードを思い出してもらえれば、幸いです。

もしかすると、本当に悪い方向に転がる前に誰かに止めてもらう。あるいは誰かを止めてあげることができるかもしれません。
少し説教臭くなってしまいましたが、今回のこぼれ話はこんな感じです。
ありがとうございました。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 13』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

どうもご無沙汰しております、理不尽な孫の手です。
無職転生の十三巻でございます。
さて、この十三巻、お手に取ってみた方はすぐにお気づきになられるかと思いますが、表紙が一巻と対応したものとなっております。
パウロの位置にルーデウスがいて、ゼニスの位置にシルフィがいて、まだまだ小さいノルンとアイシャがいて、ロキシーはさほど変わらない位置で、しかし変化のある表情を浮かべている。一巻の時と同じ、家族写真のような表紙です。
実はこれ、一巻を出した時から『十二～十三巻あたりでできればいいね』と狙っていたものなのです。
当初は何巻まで出せるかわからなかったため、『できれば』という範疇を越えることは出来なかったのですが、ようやく実現することが出来ました。
それも皆様のお陰でございます。ありがとうございます。

・十三巻について
さて、この十三巻の表紙が一巻と対応しているのと同様、内容の方としても、無職転生後半の物語のプロローグに位置しています。
パウロが死に、守るべきものを明確にしたルーデウス。
彼はまだまだ自分がやるべきことをうまく理解できておらず、しかし彼なりに色々と考えて決定し、行動していきます。
十三巻は中でも『守るべきもの』をテーマとした話になっております。
彼が今持っているもの、大事にしているもの、今後のルーデウスの行動指針や思考の核となる部分の話……とはいえ、基本的には何気ない日常的な話の連続になるので、十二巻の冒険話を期待していた方には、少し物足りないかもしれません。
もちろん、作者としては面白い話が書けたと思っているので、あまり難しいことは考えずに楽しんでいただければ幸いです。

・書き下ろし短編について
今巻の書き下ろし短編は、七巻に登場したサラの話になります。
七巻のこぼれ話でも書きましたが、サラはとても難しい立ち位置にいるキャラで、再登場については色々と悩みました。
ルーデウスとサラ、二人が会えば、両方に苦々しい思い出が蘇るのです。二人のかつての関係は元には戻らず、ただ当時の事を語り合い、そして別れるだけなのです。
でも、苦々しい思い出を乗り越えてこそ前に進めるというものです。
というわけで、今回は再会し、かつての事を話し合い、また別れるだけのお話です。
サラの再登場を熱望していた方にとっては、ちょっと物足りなく感じるかもしれません。

ですが、今回の一件でサラもまたわだかまりが消え、自分の未来に向かって後ろめたい気持ちなく進んでいくことができるようになりました。
となれば、今度出会った時は苦々しく思う相手ではなく、頼れる仲間としてルーデウスと関わってくることでしょう。
その時を、どうぞご期待ください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 14』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

どうも、毎度お世話になっております。理不尽な孫の手です。
そして無職転生の十四巻でございます。
ついこの間、十三巻が出たばかりだというのに、早いものですね。
ここまで出させて頂けたのも、皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

今回のお話は、二巻あたりにチラッと出てきた空中城塞に行ったり、三巻の舞台であったリカリスの町に行ったりと、そんな感じの話になります。
さて、今回も大体いつもと同じように、キャラクターの裏設定などに関してちょいちょい書いていこうかなと思います。

・空中城塞
無職転生の世界観を作るにあたって、私の中で『よりファンタジーっぽい世界にしたい』という欲求がありました。
ファンタジー感は様々な要素で出すことができます。現実世界で見られないロケーションを提示することも、その一つです。
この世界では見られないロケーションは、そこに行ってみたい、見てみたいという感情、すなわち冒険感に繋がります。
冒険、みんな好きですよね。
RPGをやっていて、空に浮いている島や、高い山に囲まれた城、海に囲まれた祠、といったものを発見したことは無いでしょうか。もしかするとあそこには何かすごい装備があるのかもしれない。何かすごい秘密があるのかもしれない。そんな気持ちになったことは無いでしょうか。
その気持ちこそが冒険感です。
その冒険感を出すために、『空中大陸』は必要なものでした。
そうして生まれたのが、空中城塞です。

・ペルギウス・ドーラ
ペルギウスはかなり初期に構想してあったキャラです。
当初は、主人公のライバル的な存在で、なんか偉そうで、忠実な下僕がたくさん存在していて龍族なので長生きしていて、でもどこか子供っぽい。と、そんな感じでしたが、まぁ色々あって、「ラプラス戦役における主人公」という位置づけになりました。
ラプラス戦役というのは、無職転生時代から四百年前にあった戦争ですね。
『彼はその戦いの中で多くのものを手に入れ、多くのものを失い、精霊たちだけに囲まれた孤独な王となる。そんな孤独な王が望むものはただ一つ、友の最後の願い、魔神ラプラスの討伐。彼はラプラスが復活するまでその牙を研ぎ澄ませ続け、そして刺し違えてでも倒そうと意気込んでいる。そう、彼にとってのラプラス戦役は、まだ終わっていないのだ。』という設定だけは存在していました。

さて、ではそんなペルギウス様は一体どこに住んでいるの？
そう考えた時に、自然と空中大陸が浮かんできました。
空中大陸に住んでいる天上人が、空からずっと世界を観察している……なんてのは、ファンタジーではよくある設定ですね。
というわけで、ペルギウスの設定は「かつての戦争の英雄」で「空中城塞は四百年前の戦争でペルギウスが魔神を倒すべく作り出したもの」で、「ペルギウスはかつての仲間の復讐を誓い、空中城塞で魔神の復活に備えている」というような設定が生まれました。
でも、ただ備えてるだけってのも味気ない話なので、彼には芸術品集めという趣味を持たせました。
お陰で、ザノバとの相性は抜群ですね。
ともあれ、そうしてペルギウスと空中城塞が生まれました。

・アトーフェラトーフェ・ライバック
そんな、昔から設定のあったペルギウスとは対照的に、アトーフェはわりと思いつきのキャラでした。
彼女は私の別作品である『王竜王討伐』という作品の主人公……の、母親にあたります。
『王竜王討伐』を簡単に説明すると、北神カールマンという剣の達人の息子が、ドラゴンの王を討伐するお話です。
主人公は、かつての戦争で活躍した人族の剣士と女魔王が、大恋愛を繰り広げた末に生まれた子供。尊敬する父の偉業を正しく世間に認めさせるために、自ら父の二つ名である『北神』を名乗って世界を旅して名声を高めようとしています。
そんな主人公に剣を教えたのは、何を隠そう母親であるアトーフェです。
彼女はラプラス戦役で魔族側の急先鋒として戦った魔王であり、北神カールマンに剣術を教わった剣の達人です。
とはいえ、当初にあった設定はその程度で、実際にどんな性格をしていて、どんな言動をとるかというのはまだ不透明でした。多分、武人っぽい感じのキャラなのかな？ というぐらいです。
そこから不透明なものを明確にしていくわけですが、単に「こうすりゃ面白いだろ」と適当なキャラ付けをするのは（まあ、それはそれでいいのでしょうが）、せっかく別キャラと関係のあるキャラなのにもったいない気がしました。
なので、彼女と関係のあるキャラを参考に、キャラ付けを行いました。
『王竜王討伐』の主人公が楽天的、弟であるバーディガーディが豪放磊落。と、彼女の血縁から、どう考えても彼女の頭は良くないだろうという結論に至り、底抜けのアホになりました。
加えて、物語に魔王らしい魔王を出したい、という気持ちもありました。
武闘派かつ暴力的で、他者を支配したがり、知識より力を重んじる。ていうか言葉が通じない。
そんな感じで生まれたのが、アトーフェラトーフェ・ライバックという人物でした。

十四巻でそんな二人のキャラを出したのは、十五巻以降への布石というのもありますが……。
四〇〇年前はあれぐらい強い奴がゴロゴロいて、そんな奴らが戦争をしていた。
空中城塞やリカリスの町は当時から存在していて、そこを舞台に戦った者達がまだ生きている。
そんなロマンを感じていただければなと思っております。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 15』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
無職転生の十五巻。とうとう発売いたしました。
これだけ出させていただけたのも、皆様のお陰です。本当にありがとうございます。
と、毎回のように書いているのですが、本当に皆様のお陰なのです。
現在、出版業界の景気があまりよろしくないことは、皆様もよくご存知のことと思います。
無職転生は『小説家になろう』のランキングでは一位を取らせていただきましたが、だからといって無条件で二十冊も三十冊も本を出してくれるわけじゃありません。出版社も商売ですので、書籍が売れ、利益がでなければ続刊が出せません。無職転生が打ち切りになる可能性は、十分にありえました。
そんな中、私の方にも「打ち切りになるのであっても、ここまでは出せたらいいな」というラインが幾つかありました。
一つは六巻。魔大陸から長い旅の末、フィットア領に帰ってきた所です。
全体の話としては中途半端な所ですが、一区切りは付いています。ここらで終わって続きはＷＥＢで、という感じでも、とりあえず記念にはなったかなと思えたでしょう。
一つは十二巻。そう、転移迷宮でパウロが死んで、ルーデウスが決意を新たにする所ですね。
家族との和解や、親の死と真正面から向き合うというのは、無職転生における大きなテーマとなっています。それを一つ書ききっているので、ここで終わっても、伏線はまだまだ残った状態ですが、ひとまずは満足と、そんな感じになったかと思います。
しかし、そうしたラインを超えて、十五巻まで出させていただきました。
少し本文のネタバレになってしまいますが、ルーデウスがヒトガミに唆され、オルステッドと戦う話です。
十五巻は、「ここまで出せたらいいな」と思っていた巻ではありません。
むしろ「ここまで出したら最後まで出したい」と思っている巻です。
なので私の次の目標は最終巻まで、です。まぁ、もちろん今までもそれを目標に頑張ってきたのですが、『次の目標』と『最終目標』は、また少し違うものですからね。
でも今は同じです、次の目標が最終目標です。
今回は少し短い文章となりましたが、皆様、これからもよろしくお願いいたします。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 16』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
無職転生も十六巻、思えばたくさん出させていただいているなと、毎回のように思っております。
何にせよ、これだけ出させていただけているのも、皆様のお陰です、本当にありがとうございます。
今回の十六巻は、オルステッドの配下となったルーデウスの初任務。緊急クエスト『アリエルの下着をタンスごと盗め！』の前編となっております。
もちろんウソです。
ネタバレを無視して書きますと、アリエルを王位に就かせろ！ そのための一手としてペルギウスをアリエルの後ろ盾に付かせろ、でも今のままだとどうしようもないから、なんとかしろ！ というものになります。
回りくどい話です。
WEB版では、そのあまりの回りくどさゆえに、特にイベントも挟まず、ちょっとルーデウスがアドバイスを与えただけで、アリエルがいい案を思いついてしまう、という流れになっていました。
まぁ、アリエルも大国の王になろうという人物。クリティカルなヒントを得れば、あっさり思いついてしまってもおかしくないだろう、と思っていましたが、やはり読み直してみるとどうにもご都合主義感というか、雑な感じが拭えない……。
というわけで、今回は大幅に加筆。ペルギウスを説得するための情報探しに、遠路はるばる『図書迷宮』と呼ばれる場所に赴き、そこで膨大な本の中から素敵なサムシングを見つけ出す、という話を追加しました。
その話により、ルーデウスがアリエルを助けることに対する説得力、アリエルとシルフィ、ルークの友情、アリエルが王を目指すのを応援したくなるような気持ち……などが、出ていればいいなーと思っています。
分量的にもかなり大きくなったので、楽しんでいただければと思います。

さて、久しぶりにキャラクターの創作秘話的なものを書いていこうかなと思います。
アリエルとルークについてです。
アリエルとルーク、お姫様と騎士。
この二人については、当初から設定だけは存在していました。アスラ王国には王宮があって、そこには絶世の美少女が住んでいる。美少女の側には、常にイケメンの騎士がいる。見目麗しい二人は、口を開けば下品な話題ばかり……といった感じのキャラクターです。
ルーデウスは庶民的な男なので、彼らと関わり合いになるようなイベントについては、まるで考えていませんでした。
そんな感じで一章、二章と書き進め、転移事件が起こります。
ルーデウスとエリスは魔大陸に、ロキシーはそれを探しに旅に、といった感じで動く中、さてシルフィはどうしよう、と考えました。

彼女がヒロインとして成長するためには、ルーデウスに依存しなくなることが絶対条件です。

つまり、自分一人で過酷な場所に行き、そこで頑張って誰かと友情を深め、友人を作る……と、子供時代にできなかったことができるようにならないといけないわけです。
彼女にとっての過酷な場所とはどこでしょう。
周囲に頼れる人はおらず、自分だけで色んなことを学び、自分だけで周囲に適応していかなければならない場所。
そう考えた時、ふっと思いついたのが、王宮でした。
王宮は田舎で生まれ育った彼女が、今まで見たこともないような異世界です。そこで、『白い髪』というギフトを手に入れた彼女が、これならばと奮起し、友人を作り、自分の立場というものを作っていくのです。
そして、彼女の友人として選ばれたのが、アリエルとルークでした。
アリエルとルーク、そしてシルフィは、無職転生の中において、かなり異質な取り合わせです。
互いに弱い所を補いあっているわけでもなく、長所を助長しあっているわけでもない。対等というわけではなく、上下関係もある。付き合いの長さも同じというわけではない。兄妹のように扱っているわけでもなく……ハッキリと言葉で表せないような、そんな関係です。
そうした歪な関係の中で、シルフィは最適な立ち位置を模索し、努力する。
その努力の結果、二人はシルフィに友情を感じ、シルフィもまた二人に友情を感じるようになる。
それこそが、シルフィにとっての、最も大きな成果であり、ルーデウスと対等な人間になれるような成長なのではないかな、と私は思っています。

さて、十六巻では、アリエルは見事にペルギウスのハートを射止めました。
次回はアスラ王国後編。
準備が終わり、戦いの始まりです。
ご期待ください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 17』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
無職転生も十七巻。毎度のように思いますが、たくさん出させていただいております。
これだけ出させていただけているのも、皆様のお陰です、本当にありがとうございます。
今回の十七巻は、オルステッドの配下となったルーデウスの初任務。緊急クエスト『アリエルの下着をタンスごと盗め！』の後編となっております。
最高級のヒノキでできたタンスを見たルーデウスが、こんなのファンタジーの王女様のタンスじゃない、と駄々をこねるところが見どころです。
が、もちろんウソです。
アリエルが王様になるための戦いの後編、実際にアスラ王国に赴き、そこで倒すべき敵を倒して実権を握る話です。
内容的にはWEB版とほとんど変わらないのですが、デリックの細かい設定や、ペルギウスに認められるまでの流れなど、前段階での分量を大きく増やしておりますので、WEB版より感慨深いものになっているのではないかな、と思います。
どうぞ、お楽しみください。

さて、今回は世界設定について書いていこうかなと思います。
主に、剣術について。
皆様御存知かと思いますが、無職転生の世界には、三大流派と呼ばれる、剣術の大家があります。
剣神流、水神流、北神流の三つです。
もちろん流派自体はもっとあるのですが、剣が生まれ、剣を扱う技術が生まれ、長年掛けて洗練されていった結果、その三つが残っていった……という設定です。
攻撃特化の剣神流、防御特化の水神流、生存特化の北神流です。
こうした流派を考える際に、まず私が考えたのは「この世界の剣術は、人間を相手にするものではない」ということです。
無職転生の世界には、人間よりも人間にとって脅威となる存在がいます。
そう、魔物です。人間よりも体が大きく、時に硬い鱗で覆われていたり、時に素早く動いたり、時に再生したりします。
そういった存在がいる世界なのだから、剣術も、そういった脅威に対するものだったはずだ、という観点から、三つの流派の発想が思い浮かびました。魔物に通用するなら、人間にも通用するはずですからね。
ひ弱な人間がいかに強大な魔物を倒すか、それを突き詰めたのが無職転生世界の剣術の考え方のベースになりました。
そして、その最たるものが剣神流です。
圧倒的な剣速と攻撃力により、あらゆる魔物を一撃で確実に仕留める。
理論的には最も単純で、合理的です。

なので剣神流は、剣を持つあらゆる人々に愛され、活用されてきました。
攻撃を主体にした剣術があるなら、逆もあるだろう。
ということで、水神流も生まれました。

水神流のモットーはカウンター。相手の力を利用する技ですので、人間がどれだけ非力でも、十分に相手を葬ることができます。
さて、でも無職転生の世界には『闘気』と呼ばれるものがあったり、『魔剣』というものがあったり、また種族によって体型や能力に違いがあったりします。
剣神流や水神流は、身体能力や武器の性能によって、成果が大きく左右される流派なのです。
そうしたところで優れない者たちは、剣士として大成することはできないのか？いいや、彼らには彼らに適した戦い方というものがあるはずだ。
スピードがなくパワーがあるなら、鎧をまとったり、尻尾を持っているのなら、尻尾をうまく使ったり、手足を切られても生えてくるなら、捨て身で戦ったり……。
そういう考え方を元に考え出されたのが、北神流です。
とはいえ、各種族が自分たちの思うがままに戦っているだけでは、流派として体系化されることはありません。
では、どういう歴史があれば、流派として体系化するのか。
そうだ。そういった考え方を持った人間の剣士が不死身の魔王と結婚し、その子供が受け継いだものであれば、流派として定着するのでは？ というような考えから、『北神流』や『北神カールマン』という存在が生まれました。
北神流という流派には、他の流派にはない様々な技が存在しています。その全てを扱える者は少ないですが、片手や片足を失っても戦えたり、自分の種族の特性に合わせた戦法をとれる流派は、格式こそありませんが、傭兵や冒険者など、自分の体に変化の起きやすい職業の者たちに好かれています。
今回の巻では、北神流の中でも特に異色の戦い方をする『奇抜派』と呼ばれる剣士たちが登場します。
彼らは剣士を目指しながらも、剣神流や水神流にイマイチなじめなかったり、体型的に非常に不利であったりといった様々な理由から北神流の門戸をたたき、自分なりのやり方を開発し、北帝やら北王といった位に上り詰めました。
そうした人々のストーリーというのも、書けば面白いかもしれませんが、なかなか機会がありませんね。
ともあれ、オーベールやウィ・ターといった北神流奇抜派の活躍を、どうかお楽しみください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 18』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
無職転生も十八巻になります。
十八巻。すごいものですよね。よくこんなに書いたなと思います。
これだけ書かせていただけているのも、皆様のお陰です、本当にありがとうございます。
十八巻は、日常的な話の回となります。
ルーデウスが度重なる出張で家を留守にする中、ドロボウ猫が家に上がりこんで、旦那を誘惑してしまうというお話になります。
嘘です。猫の子はドロボウをしていません。
ともあれ、主にリニアとプルセナ、そしてアイシャがメインの話になります。
ネタバレになるので、「本編をもう読んだよ」あるいは「WEBの方を読んだからどうなるか大体知ってるよ」って方はどうぞお読みください。

・リニアとプルセナについて
今回、リニアは奴隷に、プルセナは罪人になります。
ぶっちゃけた話、いや、本当にリニアには悪いと思っているのですが、十三巻の卒業式においてリニアが商人にでもなるって言った時、「こいつ絶対に借金抱えて戻ってくるんだろうな」って思いながら書いていました。
生意気な同級生がなんやかんやあって奴隷になり、主人公がそれを買う。
『小説家になろう』ではありがちな話ですね。
さて、リニアは失敗したわけですが、プルセナはどうかなと考えました。
私はリニアとプルセナの関係性はできる限り対等にしようと考えていました。
口喧嘩をしても勝ったり負けたり、成績もどんぐりの背比べ。
片方は馬鹿だけど、片方は結構賢くて馬鹿に付き合ってあげている、という形にはしたくない。
両方馬鹿でいてほしい……。
そうした思いが、今回の悲惨な事件を巻き起こしました。
お亡くなりになられた干し肉様には、深い冥福をお祈りします。
そういう思考で今回の話を書いたわけですが、思うんですよ。
リニアが商売を始めた時、もしプルセナがいたら……。
プルセナが干し肉に手を出さなければならなくなった時、もしリニアがいたら……。
もしかするとお互いがその場にいれば、こんな手酷い失敗はしなかったんじゃないかなって……。
え？ ならない？ いてもいなくても同じ？ むしろもっとひどい結果に？
……まぁ、やっぱり二人は一緒にいてほしいよね、ってことで。

・書き下ろし短編について
今回の書き下ろし短編は、ジュリの話になります。

八巻のこぼれ話にも書きましたが、ジュリは初期の構想にはいないキャラでした。
『怪力の神子』の力で、人形を作れないザノバ。

そんな彼のために技術を叩き込まれ、人形を作るジュリ。
色々あってツーカーな仲になっていく二人なのですが、関係性は主人と奴隷のまま。
ザノバはあの世界の王族なので、奴隷という立場の者に対しては、わきまえた態度をとります。
ジュリもジンジャーから繰り返し「奴隷だから」と教育を受けているので、それ以上の関係になろうとはしていません。
でも、長い年月は二人の仲をより近くさせていきます。
かといって、恋人のような関係になるのかというと、「ちょっと違うな」と感じます。
ジュリの方はともかく、ザノバはジュリがどれだけ好意を向けても、それを真正面から受け入れることはないでしょう。とはいえ、現状の状態がずっと続くわけではなく、今のままで少しずつ二人の関係は変化していくはず。
そんな変化の第一歩として、今回の話を書きました。
私は常々、人間の関係性というのは、言葉では表しにくいものだと思っています。
友達、親友、恋人、夫婦……関係を表す多くの言葉はありますが、友達にもいろんな形の友達がいますし、恋人にもいろんな形の恋人がいますよね。その関係性は、決して一言でまとめてしまえるものではないと、私は思います。
ザノバとジュリは『主人と奴隷』。
だけど、二人だけの特別な関係であることを感じてもらえればなと思います。

では、以上です。
次巻もお楽しみに！

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 19』

理不尽な孫の手先生書き下ろしこぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
無職転生も十九巻になります。
あと一巻で二十巻でございます。これだけ書かせていただけているのも、皆様のお陰です、本当にありがとうございます。
さて、今回の十九巻は、ザノバの話です。
ザノバがパックスに呼び出されて帰郷し、そこで自分にとっての親族とは何かとか、そういったことを見つめ直す話になります。
WEB版では、あまり人気のなかったエピソードですね。
決して愉快な話ではないけど、必要な話。
そういったエピソードを書かなければならないのは、中々に大変です。
面白くない話でも、何かしら工夫をして面白いように見せかけるのが、作者としての力量の見せ所なのかもしれませんが……。
この話をWEBで書いてから、もう四年近く経ってからの再編になりますが、結局この話をとてつもなく面白くみせる手立てはみつかりませんでした。いらない部分を消したり、気になった部分を修正したりと、細かい部分は変更してはいるのですが……。
もちろん、今回の話を、単純に面白おかしくするのは可能だと思います。
あのキャラに過去を深く反省させ、過去の面影を感じさせないような、底抜けに良いキャラにして、ルーデウスと二人で手と手を取って、迫り来る敵を倒してハッピーエンド。
誰も不幸にならないし、主人公がまた一つ良いことをしたと、読者も気分よく読み終えることができる。そういう物語に変えることは、きっと可能です。
エンターテインメントの常識で考えれば、むしろそうするべきなのでしょう。
でも無職転生のテーマの一つに『人生』というものがあります。
人生には、ただただ辛い出来事もあるし、ままならない事もあるし、それらを受け入れていかないといけない時もある。
人生というテーマで小説を書こうと思ったのなら、今回のような話は、避けて通れないのではないかなと思います。

さて、今回は『キャラクターの変化』について語っていこうかなと思います。
無職転生において私が気を付けていた点の一つに『キャラクターをキャラクターとして存在させない』というものがあります。
パックスというのは、嫌な奴です。
『王子』という、自分が努力して手にしたわけでもない立場で好き放題にやっていて、うまくいかなくなると癇癪をおこす。そんなキャラクターです。
『キャラクターをキャラクターとして存在させる』ということは、そこに理由をつけないのと同意になります。パックスは嫌な奴だから、生まれたときから理由もなく嫌な奴だし、嫌なことをするし、傲慢な態度をする、という感じです。

『キャラクターをキャラクターとして存在させない』というのはつまり、そこに理由をつけることになります。
生まれたときは誰もが嫌な奴じゃなかった。傲慢な奴など存在していなかった。

パックスも、きっと生まれてから無職転生に出てくるまでの間の人生があり、その中で何年もかけて、傲慢で嫌な奴になっていった。そこには理由がある。
つまり、何年もかけて変化してきた結果、今に至っているわけです。
そして、何年もかけて変化してきたのなら、また何年もかければ変化していく。
作中で何年か経過すれば、当然ながらキャラクターも変化する。
パックスもまた、理由があるから傲慢な態度を改める余地がある。
そういった考え方です。
だからルーデウスも長い年月をかけて変化してきましたし、他のキャラクターも変化していくわけです。
ですが、どれだけ努力し、変化をしても、変わらないものや、手に入らないものもあります。
パックスが何を求めていたのかというのは、あえて具体的な言葉で書いていませんが、それは人生において人が求めるものを、たった一言か二言で表現できるものではないと思っているからです。
そうした、言葉で表せない何かが、どれだけ努力しても手に入らない。
手に入らないということを受け入れることができるかどうかで、その後の人生が大きく変わってきたりするのだとは思いますが、パックスはそれに耐えられませんでした。
そして、そんな彼の人生に影響を与えてきた人々が、苦悩します。
自分があの時ああしたから、こうしたから、ああすれば、こうすれば。私は彼に、彼の望むものを与えてやることができたのに……。
今まで取るに足らない小さな存在だと思っていた人物が、大きな衝撃と影響を与えるわけです。
結局、取るに足らない小さな存在なんておらず、誰もが必死に生きていて、誰かに影響を与える存在になりうるわけです。
少し話がとっちらかってしまいましたが、今回の話では、そういった変化や、ままならない部分をテーマとして書いております。
少し暗い話ではありますし、愉快な話というわけでもありませんが、何かしら感じ取れる部分があっていただけたなら、幸いです。

では、次巻もお楽しみください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 20』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
無職転生も二十巻になります。
十巻の時にも思いましたが、やはり十の倍数は節目に感じられますね。
思えば、この二〇十八年は、停滞の年でした。母が亡くなり、遺産相続関係の手続きにてんてこ舞いになり、なんとかかんとか目の前のことをこなしているうちに、あっという間に過ぎてしまった。そんな感じです。
目の前にちょくちょく小説の仕事があったお陰で、なんとか無職にならず、来年を迎えられそうです。仕事を用意してくださった編集部はもちろん、読者の皆様のお陰です。
本当にありがとうございました。
さて、二十巻ですが、節目の巻に相応しい大激動の巻……というわけではなく、どちらかというと日常の話がメインとなっております。
今巻では、クリフが卒業前に進路を決めるに至った話や、ザノバが店を立ち上げる話なんかを書き下ろしましたので、ぜひともお楽しみください。

今日のこぼれ話としましては、ラノア魔法大学新生生徒会についての話をしようと思います。
ノルン会長率いる生徒会ですね。作中にはあまり出てこない集団なので恐縮なのですが、設定としてはきちんと存在しています。
ノルン生徒会は、アリエル生徒会と大きく違う集団です。
アリエルの生徒会は、基本的にアリエルとその配下が幹部で、それ以外のメンバーもアリエルの息のかかった貴族の子弟が中心で、種族も人族ばかりです。
基本的に誰もがエリートで、家柄も成績も良いような人々が集められました。
将来、アスラ王国の官僚になりうるような人材を取得しようという、アリエルの目的に合致した形ですね。
それに対してノルン生徒会は、身分に関係なく、様々な種族が揃っています。
人族がいれば、長耳族がいる、獣族がいる、魔族がいる。
共通して言えるのは、彼らの大半が元落ちこぼれということです。
勉強が得意で、家柄も良くて、順風満帆な人生を歩んでいる人は、そう多くありません。
誰もが、どこかしらに問題を抱えていたりします。
特に副会長や書記、その他幹部になるような人物は、一年生や二年生の時に、何かしらの理由で退学に近いところまで追い込まれています。
それは勉強についていけないだとか、顔が強面なせいで暴行罪の冤罪を掛けられただとか、種族が原因でイジメられたりとか、そういった些細なことではありますが、彼らの人生を左右するような、重要な出来事です。
ノルンはそんな彼らを助けました。

ノルンに出来ることは決して多くはありませんでしたが、時に先輩であるクリフやザノバに力を借り、時に義理の姉であるロキシーや妹であるアイシャに知恵を借り、一つ一つ、真摯に丁寧に解決していった結果、多くの生徒から慕われ、生徒会長に推薦されることとなったのです。

ノルン生徒会はそうした背景からか、ノルンを慕う者や、いわゆるスクールカーストの外側にいるような人々が集まり、地味だけど堅実な活動を行う集団となっていったのです。
アリエル生徒会は、漫画やゲームにあるような権力のある生徒会。
ノルン生徒会は、現実の学校に存在していそうな、地味な生徒会。
メンバーが違うだけで、同じ名前の組織でも、その内実がガラリと変わってくる。人の社会というものは、面白いですよね。
本編にはノルン生徒会はちょいちょいとしか出てきませんが、いずれノルン視点での学校生活をスピンオフで書いてみたいものです。本当にどこかの学園ものみたいになりそうですが。
では、次巻もお楽しみください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 21』

理不尽な孫の手先生書き下ろしこぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
『無職転生』も二十一巻になります。
二十巻の時も思いましたが、なんとも現実味のない数字ですね。いつの間にそんなに出たんだろうって思います。
さて、今回の二十一巻は、ミリス編の後半です。
いなくなったゼニスを探し、ルーデウスが東へ西へと奔走する、そんな話です。
（いや、ずっとミリスにはいるんですが）今巻のテーマは『うざい親とは』みたいな感じになっています。
うざい親、つまり面倒でうっとおしい親のことですね。巷では『毒親』と言われていたりする人のことも含めています。
皆様は、理想の親像というものを持っているでしょうか？
こんな親なら尊敬できるとか、こうしてくれる親がいいとか、こういう親になりたいとか。
理想がハッキリしていなくても、自分の親を見て、自分が親だったらこんな事は言わないとか、こんな親には絶対にならないとか、一度でも思ったことがあるのではないでしょうか。
私はあります。
私の母は、世話を焼くのが大好きで、自分の子供のみならず、誰彼構わず世話を焼いてしまう、世話焼きおばさんで、亡くなった時も葬儀に参列してくださった方々が「あなたのお母さんにはお世話になったから、困った事があったらなんでも言ってね」と口々におっしゃって頂き、なんだかとっても誇り高い気持ちになりました。
が、学生の頃は、うっとおしく世話を焼いてこようとする親を目障りに感じていました。
いや、それぐらいできるから。自分でやるから。ついてこなくていいから、と。
ま、反抗期ですね。
実際のところ、私の考え方も間違ってはおらず、反抗期にそうして反発しなければ、私は一人で何もできない人間になっていたと思います。当時の母は自分の子供がヘタクソな料理を作ったり、取れたボタンを不器用に付け直したりしているのを見ると、自分の方がうまくできるとばかりに、作業を奪ってしまう人でしたので。
ゆえに私は、自分が親になった時には、こうはなるまいと心に誓っておりました。
しかしながら、今になって思うわけです。
果たして、母の行動は、自分の庇護欲を満たすためだけの身勝手な行動だったのか、と。
そうじゃないでしょう。
確かにそういった側面もあったでしょうし、必ずしも全てが正解だったわけではなく、時に私にとってマイナスを与えてしまうこともありましたが、それでも私を思っての行動だったのだろう、と。
そう考えると、世の中でうざいと思われている親には、子供のためを思って、しかし間違った方向の世話の焼き方をしている方も多くいるのではないかと思うわけです。
もちろん、中には子供のことなんてまったく考えていない親もいるでしょうが……。

私としては大半が親としてきちんとしようと思いつつ、しかしうまくできていないだけだと思いたいところです。
今巻に登場するクレア・ラトレイアは、そうした子供の将来を考えているけど、極端な考えを押し付けてくるうざい親です。
人によっては、嫌悪感のある話かもしれませんが、自分の親の今までの行動、あるいは親としての自分の行動を考えてみる機会になっていただけたなら、幸いです。
では、次巻もお楽しみください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 22』

理不尽な孫の手先生書き下ろしこぼれ話

ご無沙汰しております。理不尽な孫の手です。
二十二巻でございます。
前巻の時に発表したのですが、アニメ化企画進行中となりました。これだけ巻数が進んでからアニメ化というのもなかなか珍しいことで、それもこれも読者の皆様のおかげでございます。本当にありがとうございます。
アニメ化自体は嬉しいのですが、仕事量が増えて小説の方を書く時間が取れなくなりつつあるのが悩みの種です。
さて、二十二巻ですが、来たるべき決戦に備えて戦力を集める話になっております。いわゆる溜め回というやつです。ちょっと地味ですね。
今巻では、WEB版でサクッと終わらせたエピソードである、王竜王国に行く話と、魔王アトーフェが話を聞いてくれない話を、大幅にボリュームアップしてお届けします、ぜひともお楽しみください。

さて、今日のこぼれ話としましては、魔王アトーフェラトーフェについて書いていこうかなと思います。
彼女は不死魔族と呼ばれる魔族です。不死魔族は太古の昔に魔族のトップ層だった種族で、今もなお魔族筆頭のような位置付けにあります。
特徴としては不死身であること。
寿命というものは存在せず、肉体が消滅しても時間が経てば復活します。
だからこそ、危機感というものがなく、自分の欲望に忠実で、ふわっと生きています。人間というものは、いずれ死ぬからこそ、一生懸命に、様々なことに注力しつつ生きているのです。死なないのなら、誰もがもうちょっと大雑把でしょう。
さて、不死魔族は大雑把……といっても、何も考えていないわけではありません。
長く生きてきたからこそ、様々な経験を経ており、時折思い出したかのように深いことを言う。
それが不死魔族という生き物です。
あの世界においても最強クラスの生物ですね。
魔王アトーフェは、めちゃくちゃ頭の悪い馬鹿で、基本的な部分は生まれた時から何も変わっちゃいないのですが、第二次人魔大戦の頃から生きている不死魔族なので、それはもう色んなことを経験し、彼女なりの哲学や悟りを得ています。
今でこそ単なる乱暴者ですが、時代によっては現在に輪をかけた悪逆の限りを尽くす魔王であったり、色々と悩んで考える時期があったり、何かを決意する瞬間があったりもした結果、今のような感じになっていったのです。
そして彼らは、その無限の寿命を持って、それを繰り返していく。
不死魔族に関しては、そういう『人生を、より長いスパンで、終わりなくやっている人がいたらどんな感じなんだろう』という意図で書いています。

それは同じく不死身の魔王であるバーディガーディーや、似たような種族であるキシリカも同様です。
彼らには膨大な設定が存在していたりもしますが、無職転生において、それを深く掘り下げて語られることはありません。

しかしながら、この世界には人族はもとより、そこらのエルフよりも長い年月を生きている人々がいて、ルーデウスは長い年月をかけて、そうした連中と対等に付き合えるところまできた、というのを感じていただければ嬉しく思います。
では、次巻もお楽しみください。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 23』

理不尽な孫の手先生書き下ろしこぼれ話

二十三巻発売でございます。
もう、完結までの巻数も片手で数えるほどとなってまいりました。
ここまで出させていただいたのは、皆様のお陰です。本当にありがとうございます。
さて、二十三巻は今までに無いほど書き下ろしの量が増えております。
ルーデウスが三人の嫁と一緒に天大陸を旅する話や、エリスと一緒に紛争地帯に赴き、ちょっとした感慨深い場所にたどり着いたりします。
ちょっと駆け足な内容になってしまったかもしれませんが、お楽しみいただければ幸いです。

今回のこぼれ話では、もし転移事件が起きなかったら、というIFの話をつらつらと書いていこうかなと思います。
恐らく皆様、ある程度の想像はつくかと思いますが、ご想像通り、基本的にルーデウスは恋愛に関してはド素人……というか、性欲に素直なタイプなので、当然フィリップの奸計に逆らえず、十五歳になる頃には、エリスと結婚することになるかと思います。
シルフィのことを忘れたわけではないでしょうが、そこはフィリップがうまいこと、妾的な立場に彼女を収めるように調整することでしょう。彼自身は妻が一人しかいませんが、ミリス教徒というわけではありませんからね。
シルフィがどう成長しているかはわかりませんが、若くして無詠唱で治癒魔術が使える優秀な魔術師ですから、フィリップ的には積極的に取り込みたい所でしょう。
シルフィ的にはルーデウスの側にいられるし、身近で二人の妻を持つ男を見ているので、違和感は無いでしょう。ルーデウスへの依存は治らないかもしれませんが……。
暴力大好きなエリスと、イジメられっ子なシルフィは、最初こそ相性が悪いでしょうが、ルーデウスが間に立ち、シルフィにエリスとの付き合い方を教えることで、シルフィも徐々にエリスと仲良くなってはいけると思います。
ロキシーは、まぁ、きっとS級冒険者として名を馳せていくことでしょう。
さて、貴族としてフィリップに擁立されたルーデウスは、アスラ王国の首都へと進出していくと思います。
ルーデウス的には貴族の派閥争いなんてどうでもいい所でしょうが、フィリップの奸計に乗せられてエリスと結婚している時点で、ある程度は織り込み済みでしょう。
フィリップ的には、ボレアスの当主の座を狙いたい所なので、ボレアスが付いているのとは別の派閥、第二王子か、あるいはアリエルの派閥への接触を図る所でしょう。

デリックを失くしていないアリエルはやる気が無いため、第二王子側について動いていく事になる……かと思いきや、第二王子の派閥は入り込む余地が無いため、やはりアリエル派となっていくかなと思います。

アリエルにやる気を出させるため、ルーデウスが一芝居うったり、シルフィが奮闘したり、エリスがルークをぶん殴ったりしてるうちに、アリエルもなんとかやる気を出し、王位を目指してくれるでしょう。
その過程で、ルーデウスがピレモンとも交流を深め、もしかするとパウロとノトス・グレイラットの関係も修復できたりするかもしれませんね。
アリエルのバックにフィリップが付いて政治的に動くので、ラノア魔法大学に留学する、なんて事もないでしょう。
フィリップとルーデウスが計画を立て、政争を行い、少しずつアリエルの派閥を広げていく。
ヒトガミも介入してくるかもしれません。助言と称して誘導し、最終的にアリエルが死ぬような形で。ヒトガミ的には誰が王になろうと関係ないでしょうが、オルステッドがアリエルを王にしたい以上、邪魔をしたがるでしょう。
そして、やはりオルステッドは助けてくれるでしょう。彼はアリエルを王にしたいので。
ルーデウスという異物の存在を確認したら、ある程度は様子見をするし、ルーデウスの言葉次第では、やはり心臓に抜き手の一発もぶち込むかもしれませんが……。
ルーデウスが無事に生き残れたら、アリエルは王になり、フィリップはボレアスの当主に返り咲く……かと思いきや、案外その頃には、当主という座にこだわらなくても良くなっていそうなので、宰相あたりになって、落ち着いているかもしれません。
かくして、ルーデウスはアスラの上級貴族にしてアリエルの側近として重宝され、二人の妻を愛しつつ、ゆくゆくはフィリップの後釜として宰相として生きていく。
ハッピーエンド。

なんて感じになっていたのかな……という、IFの話でした。
きっとルーデウスは、どんな人生でも、人の生と死に立ち会ったり、トラウマを克服したりすることで、少しずつ「本気で生きる」ことの本質に近づいていき、後悔や反省を何度も繰り返しながら、生きていくことでしょう。
フィリップは本編では無念の死に方をしましたし、IFの話でも、まぁハッピーエンドにたどり着けず、志半ばにて死ぬかもしれませんが、やりたいことに挑戦し、己の後継を育てて亡くなることを考えれば、きっと後悔は薄いことでしょう。
本編において、ルーデウスはフィリップの遺志は継がず、また別のキャラクターが継ぐことになりますが、それはまた別の話ということで、フィリップへの追悼とさせていただきましょう。
ありがとうございました。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 24』

理不尽な孫の手先生書き下ろしこぼれ話

二十四巻発売でございます。
ここまで出させていただいたのは、皆様のお陰です。本当にありがとうございます。
この巻が発売される頃には、アニメ化ももうすぐということで、皆様ワクワクしているところかと思いますが、本巻も楽しんでいただければ幸いです。
さて、二十四巻はいよいよ決戦編ということで、最後戦の緒戦となっております。
出てくるはヒトガミ第一の使徒。戦う相手は僕らのルーデウスです。。
とはいえこの話、WEB版では、わりとあっさりとした展開で、少々不評ではありました。
せっかくの敵なのにあっさり倒されすぎじゃね？ と。
個人的にはJOJO五部のノトーリアス・B・I・Gみたいな感じで読んでもらえればと思ったのですが、まぁ中々うまくいかないものですね。
そういった経緯から、もし書き足すのであれば、このあたりになるかな、と思っていた部分でもあります。
加筆部分は結構面白く書けたかなと思いますので、楽しんでいただけると幸いです。

今回のこぼれ話では、ビタとの戦いでルーデウスが見た夢について語っていこうかと思います。
前回のこぼれ話で書いたIFの話の同類になるのですが、ビタが見せてきたルーデウスの夢は、ありえたかもしれないIFの世界のものになります。
ビタは寄生した相手に心地よい夢を見せて一生夢から出られなくし、その間に自分がその人物に成り代わる、という戦法を得意としています。
この術は長く生きている人物にこそよく効いて、特に人生でチャンス、あるいは失敗が多かった者に対しての効果は劇的です。
さらに、今現在愛する人や物の存在を忘れさせることで、その術を強化させています。
ルーデウスに対しては、まさに特攻といえるでしょう。
あそこでああしていれば、あの頃にもしこうだったら、今と違う人生になっていたかも。
そしてその人生は、今の人生よりも幸せなものだったかも。
そんな気持ちが術を強くしていくわけです。
逆にエリスみたいに真っ直ぐ生きてきた人物には効きにくいですね。
取っ掛かりは数箇所あるかと思いますが、エリスは今が一番良いと思っているので、自力で抜け出してしまう可能性が高いです。
他のキャラだと、シルフィは効きにくく、ロキシーは効きやすいでしょうね。
ノルンは効きやすく、アイシャは効きにくい。
人生で迷った経験が、そのまま術からの抜けにくさに関わっていく感じです。
ルーデウスは迷いの多い人間かつ性欲が強いということで、概ね『もし妻がこの人だったら』というIFが多くなり、WEB版ではそこだけを攻めていく感じでした。

しかしながら、今回加筆するに当たってよくよく考えてみると、もしIFの人生を書くのであれば、ルーデウスが深層で最も気にかけていることを題材にするのが良いんじゃね？ と思い至りました。
つまり「この人生がいい、もし夢でもかまわない」ではなく「もし夢でも、今見ているこの光景を壊すことはできない」とした方が、逡巡が強いはずだ、という考えですね。
だから加筆部分は今回のような話となりました。
ルーデウスにとって、妻や子供達はもちろん大事ですが、それ以上に両親に対する後悔や後ろめたさみたいなものが強く残っているはずだ、と。
最初は、前世の家族でこれをやろうかとも思いましたが、ここで前世の家族に対してルーデウスが謝罪して受け入れてもらったり、けじめをつけてしまうと、ナナホシに渡した手紙の意味がなくなってしまうので、ボツとしました。
ボツパターンは、頭の部分だけ店舗特典として載せたので、読める機会のある人は、ぜひ読んでみてください。

前回のIFの話もそうですが、ルーデウスはどんな人生でも様々な問題に直面し、それを乗り越えていくことで、少しずつ「本気で生きる」ことの本質に近づいていくことでしょう。
パウロは無念の死に方をしましたし、ゼニスも決して今のような状況を望んでいたわけではないでしょうが、二人もまた、後悔からは程遠いでしょう。
それは、まったく後悔のない毎日を過ごしたからではなく、その時その時で真剣に考えて生きてきたからではないかなと思っています。
私自身も、そういう後悔のない人生を送れるといいなぁと思いつつ、日々を過ごしています。
ありがとうございました。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 25』

理不尽な孫の手先生書き下ろしこぼれ話

二十五巻発売でございます。
ここまで出させていただいたのは、皆様のお陰です。本当にありがとうございます。
この巻が発売される頃には、アニメ２クール目ももうすぐということで、皆様ワクワクしているところかと思いますが、本巻も楽しんでいただければ幸いです。
さて、二十五巻は決戦編の次戦ということで、二十四巻の時よりも激しい戦いが繰り広げられております。
このあたりは特に加筆することもないので、ほぼほぼWEB版のままで、戦い後の閑話休題的な部分でちょっとした加筆をしてあります。
楽しんでいただければ幸いです。

今回のこぼれ話では、シャンドル・フォン・グランドールという人物について語っていこうかと思います。
本文を読んでいない方にはネタバレとなってしまうのですが、彼の正体は『北神カールマン二世』アレックス・ライバックです。
まだ『北神カールマン』という存在や、北神流という流派が無職転生の時代ほどメジャーではなかった頃に活躍し、一時代を築いた英雄となっています。
その英雄譚は、ノンフィクションであるにもかかわらず、他のどの英雄譚と比べてもカッコよくドラマティックであることから、無職転生の世界でも「メジャーな英雄譚と言えばペルギウスか北神」という認識を持たれる存在となっています。
彼の一番最初の英雄譚は、一応「小説家になろう」の方にも掲載しているので※、お暇な方は読んでみていただけると幸いです。
無職転生に彼を登場させるにあたっては、少々悩みました。
個人的に、ある作品の主人公を他の作品に登場させることは、あまり良いことだと思っていません。脇役ならともかく、主人公となると作者として思い入れもありますし、作中で贔屓してしまう可能性も高いです。
主役としてのルーデウスを食ってしまうという危惧があったわけです。
私としては思い入れがあるキャラですが、無職転生の読者としてはポッと出のキャラなわけで、そんなのが我が物顔で暴れまわるのは嫌ですよね。
ただ、出さないという選択肢はないというか、他に出せるキャラがいないと考えていました。
というのも、ルーデウスは単行本にして二十五冊分の物語を紡いできており、最終的に彼は己自身が強くなるだけでなく、人と人の繋がりを己の力とする方向に成長してきました。
敵は強大で、その気になればどんな強力な駒でも用意できる存在。
それに対し、ルーデウスも今までの努力の成果として、それと同等ぐらいの存在が味方にきてくれる。しかもその味方は敵のそれと違い、自分に対した利益がなくとも、よく知らない他人に限界まで尽力してくれる。そういうのを演出したかったのです。

作者としては、いくらでも強いキャラクターを出すことはできます。でも無職転生も長く書いてきて、最後の一線という段階なので、作中で一度でも存在が示唆されたキャラクターでなければいけないと考えていました。
それを考えると、第一線を退いた『北神カールマン二世』アレックス・ライバックは最適で、他にはいませんでした。
ただ、前述した通り、彼がルーデウスの味方として登場するにあたって、かつての作品と同じような性格や性質であれば、この決戦編が全編において彼と息子であるアレクサンダーの戦いの物語になってしまうという危惧がありました。
というわけで、彼は自分が英雄であらんとすることを恥じ、さりとて英雄に対する理想や憧れは決して失われていないため、英雄になりうる人材を育成したり、英雄の手助けをしたいと願ったりするキャラになりました。
こういう、キャラクターの過去と作中のバランスを考えての調整みたいなものは、少し間違うとご都合主義っぽくなってしまいますし、シャンドルもキャラクターの魅力という点では、少し落ちてしまったかなとは思いますが、それでもやりたいことに対するキャラクター造形としては、うまくできたのではないかなと思っています。

さて、いかがだったでしょうか。
無職転生もおそらく次の巻でラストということで、書籍の方はお別れも近づいてきたかなと思います。とはいえアニメは盛り上がっていますので、引き続き応援していただければ幸いです。
ありがとうございました。

『無職転生 ～異世界行ったら本気だす～ 26』

理不尽な孫の手先生　こぼれ話

最終巻、発売でございます。
　ここまで出させていただいたのは、皆様のお陰です。本当にありがとうございます。
　最終巻では、少々加筆したり、話数の掲載順を変えたりしていますが、基本的にはWEB版の読み味をそのままにしたかったので、大幅な改変は加えておりません。
　生の無職転生の最終話をお楽しみください。
　それにしても、ようやく最終巻ですね。
　書籍として一巻を出したのが二〇一四年の一月末なので、ほぼ九年の歳月、書籍を出し続けたことになります。
　無職転生を書き始めたのが、この本が出るちょうど十年前。
　私はもうずっと無職転生に関わり続けていたので、十年と言われてもピンときませんが、幼稚園児が小学校を卒業したり、中学生が大学を卒業して社会人になっていてもおかしくないような長さです。
　本当にひと昔前になってしまいました。
　その間、私にも色々あったはずなのにあまり思い出せませんが、当時とまったく同じ考え方をしてはいないし、友達も増えましたし、以前より慎重になったり、後先を考えるようになったり……逆に自暴自棄になっているところもあるので、やはり色々あったのでしょう。

　こうして昔のことを書いていて思い出すのは、書籍化打診がきた時のことです。
　無職転生には当時、三社から書籍化の話がありました。
　その三社の中で、唯一わざわざ名古屋まで来てくれたのが、MFブックスさんでした。
　それだけが理由でMFブックスにしたのか、ちょっと早計だったんじゃないのか？　と思われる方もいるかもしれませんが、当時のなろう界隈では、その三社はどれも同じぐらいだと言われていたので、正直どこでもよかったのです。なんだったら、出版しないという選択肢すらありました。（当時は仕事もなく、親のスネをかじるニート状態だったので、あまりその選択肢は選びたくありませんでしたが）
　ていうか、他の二社はわざわざ名古屋くんだりまでは来てはくれなかったので、それだけで十分だったわけですよ。
　MFブックスさんは、わざわざ編集長と、後の社長と、編集Tの三人で来てくれました。
　その時編集長が「本気出してみませんか？」とおっしゃったのも、よく憶えています。
　対する私は「まだ自信がないので、六章を書き終えるまで待ってください」って感じでしたが。
　この巻までお読みになられた読者の方々は知ってると思いますが、六章でエリスと別れて、その後の話の雰囲気もガラリと変える予定だったので、「そこで今ほどの人気はなくなる可能性があるよ」という意味合いの返答でしたが、今思うとあんまり意味がなかったですね。
　で、無事に六章まで投稿し終わり、筆も止まる様子もなかったので、書籍化となったわけです。
　なので、書籍を出し始めた時も「六巻までは出版したい」と思っていました。

六巻は、ルーデウスとエリスの旅の終わり。少年期の終わりの話です。
あそこまで書かないと区切りがつかないから、せめてあそこまでは出させて欲しい、みたいなことを当時の編集Tに言った覚えがあります。
編集Tの返事としては「そんな心配しなくてもそこまではいけますよ」という感じでしたが……。
で、実際そこから小説家になろう書籍化ブーム的なものも起こったり、一巻が出る前に累計一位になったりするなどしたことも後押ししてか、六巻まであっさり出せて、その頃にはWEB版が完結し、「WEB版の更新を急がなくてもよくなったから、七巻は書きおろしちゃうぞー」って感じで書きおろしで七巻を出し、「次の目標は13章(12巻)だ！」ってなる頃には「もう最終巻まで出せそうです」みたいなことを言われ……その後、アニメ化の話が立ち上がったり消えたりまた立ち上がって一喜一憂したり、実際にアニメ化企画が進行し始めると、刊行もそれに合わせないとねって感じで刊行ペースがゆっくりになったり、その代わり様々な監修の仕事が山のように増え、それに伴って私の執筆スピードも緩やかになっていったりはしたのですが……。
ともあれ、続刊が出るか出ないかという部分について、あまり不安にならずにここまでこれました。
それは、それだけ長い間、皆様にご愛読いただけたお陰かなと思います。
私からすると目に見えない部分なので、ついつい自分の手柄のように感じてしまう時もありますが、私は売るための努力はほとんどしていません。だから最終巻まで出せたのは、無職転生をよい本に仕上げようとしてくれた編集部や、無職転生を買い支え、盛り上げようとしてくれた読者の方々がいた結果だと思っています。
本当に、感謝しています。
長い間。お疲れ様でした。
ありがとうございました。

『無職転生 ～蛇足編～ 1』

理不尽な孫の手先生 こぼれ話

どうも、お久しぶりです。理不尽な孫の手です。
　無職転生が二十六巻で完結ということで、様々な方面の方々にお祝いのメッセージをいただきましたが、もうちょっとだけ続くんじゃよ、ということで無職転生の蛇足編を出させていただくことになりました。
　WEB版を既読の方はご存じかと思いますが、蛇足編は本編終了後のお話を短編としてまとめたものとなっております。今回収録されているのはノルンが結婚する話、ルーシーが結婚しない話、イゾルテが結婚する話の三本と、さらに書籍版の加筆として、ギレーヌが結婚しない話を追加いたしましたので、楽しんでいただければ幸いです。
　無職転生もスペシャルブックを含めてこれで二十八冊目となります。
　これも読者の皆様のお陰です。
　本当にありがとうございました。

　さて、本編のこぼれ話ではキャラクターの創作秘話的な話をしていましたが、こぼれ話に関しては新キャラもいませんので、各話を今の私から見た感想や思い出話など書いていこうと思います。

・「ノルンの嫁入り」
　WEB版での章タイトルは『ウェディング・オブ・ノルン』。
　ノルンが結婚する話ですね。蛇足編は本編に登場した各キャラクターのその後、あるいは『結末』を書くべきだという意識があったため、この話は絶対に最初に書こうと思っていました。
　気になるお相手は……というところなのですが、これはかなり昔から決まっていました。
　問題はその二人をどうくっつけるかという部分に関してですが、ノルン側の方はさておき、ルイジェルド側の方は理由付けが甘かったかなという気もしますね。
ただ、スペルド族という異種族、ルイジェルドという特異な人物の生き方を考えると、多少突飛であっても納得感はあるかなと考え、しかしながらそれを長々と説明すると言い訳くさくなってしまうかなと考え、「俺はノルンに懸想している」という一言にまとめました。ルイジェルド側の色んな思いが籠った一言です。
あとは相手が誰であれ、一番書くべきはルーデウスの行動や想いですので、そちらを重点的に書くことで、いい感じにまとまったかなと思います。
蛇足編の一発目にしてはよく書けたのではないでしょうか。

・「ルーシーの入学初日」
　WEB版の章タイトルは『ルーシーとパパ』。
　ルーシーが学校に通い始める話ですね。蛇足編で書くべきはその後の話であり、ルーデウスのその後の話といえばやはり子育てがピンときますよね……ということで、この話を書きました。

基本的にルーデウスの前世に子育ての経験はなく、嫁が三人もいるため積極的に育児に参加せずとも家庭はまわり、仕事が忙しくて関わる機会も少なく……という所から、ルーデウスの理想とするパパ像とルーシーの理想とするパパ像に齟齬が生まれいく。この話は、その象徴的なエピソード……なのだけど、そういった齟齬は一度や二度の決定的な話ではなく、ほっこりと穏やかなエピソードの積み重ねの中に生まれるものだと思い、こうした話にしました。
うまいこと隠せてたんじゃないかなと思います。

・「イゾルテとドーガ」
WEB版の章タイトルは『アスラ七騎士物語』。
無職転生では、基本的なルールとして「ルーデウスと関係のない話は書かない」としていたのですが、蛇足編では別にいいだろうということで、ルーデウスと関係の薄い二人に焦点を当てました。
イメージ的には美女と野獣ですが、美女側をちょっと下げないと野獣と釣り合わないのではと思い、イゾルテを婚活でえり好みする、ちょっと嫌な感じの女という設定にしましたが、後に書いたドーガが思いの他好感の持てる男だったせいか、この話を読んだ亡き母が「この女にドーガはもったいねぇ」と言っていたのが思い出深いです。
とはいえ、個人的にはうまい具合にバランスを取れたのではないかなと思っています。
アスラ七騎士物語と言いますが、七人全員を掘り下げられてはいないので、いずれ書きたいと思いつつ、しかし「やっぱり無職転生ではあんまりルーデウスに関わりの無い人たちの話はすべきではないな」とも思うので、難しそうですね。
今後は伝承でのみ語られる存在になっていきそうです。

こうして見返してみると、当時は無職転生を書き終えたばかりで、疲労気味ではありますがエンジンも温まっており、自画自賛になりますが一話一話が全部面白いですね。
では、蛇足編の二巻でまたお会いしましょう。
ありがとうございました。

『無職転生 ～蛇足編～ 2』

理不尽な孫の手先生こぼれ話

どうも、お久しぶりです。理不尽な孫の手です。
　無職転生のアニメ二期二クール目が順調に放送されるなか、これを書いています。
　書き始めた当初はアニメ化なんて何一つ想定していなかったのですが、なろうで連載している頃、一度だけ無職転生がアニメ化した時のオープニング映像が流れる夢を見たことがありまして、たまに予知夢を見ることもあって、将来アニメ化とかするのかもな、と当時考えたのを憶えています。ちなみに夢で見た映像と、実際のアニメの映像はだいぶ違いました。願望だったのでしょう。
さて、蛇足編二巻は一巻に引き続き、本編終了後のお話を短編としてまとめたものとなっております。今回収録されているのはザノバの人形研究が成就する話、ルーデウス一家がミリスに旅行にいく話、ルーデウスとエリスが剣の聖地に行く話の三本に加え、子供たちの話をちょっと増量しています。楽しんでいただければ幸いです。
　無職転生もスペシャルブックを含めてこれで二十九冊目となります。
　これも読者の皆様のお陰です。
　本当にありがとうございました。

　さて、今回もキャラクターの話をしていこうかなと思います。
主に子供たちについてですね。

・ルーシー・グレイラット
　長女で、最初の子供です。
　愛情をたっぷり注がれ、彼女もまたそれに応えようと頑張った結果、とても勤勉な子に育ちました。総合的な面で見れば子供たちの中で一番優秀で、面倒見も良く、特に欠点の無い子**……**なのですが、ルーデウスがあまり家に居つけなかったり、期待しすぎて負担にならないようにしなければ、自由に生きてほしい、などと思っていたこともあって、中々難しい感情を抱いてしまいました。
　人によっては、自由という言葉が足かせになることもある、ということですね。
　ルーシーが最終的にルーデウスとどういった感じになるのか、彼女のわだかまりは解けるのか**……**そういった話も、蛇足編の中でやっていきたいですね。

・ララ・グレイラット
　次女で、二番目の子供です。
　無口で無表情で、イタズラが好きで、サボり癖があって、昼寝が大好きと、ルーシーとは真逆で、不真面目で活動的で、何をやるのかわからない奔放な子供です。
　ただ、実際のところはルーシーや他の兄弟たちを良く見ていたり、念話でレオやビート、ゼニスなどと会話していることもあって、子供たちの中で一番聡い子にもなっています。

あまり感情を外に出さない子ではありますが、内心で思っていることはたくさんあり、己の使命についても実は色々と悩んでいたりします。
ララが活躍する話は無職転生には入らない予定ですが、いずれ書きます。絶対書きます。

・アルス・グレイラット
長男で、三番目の子供。
エリスの子供ということもあって快活で元気がよく、ルーデウスの息子ということもあってスケベなところもある、男児！　って感じの男の子です。
剣術や冒険が大好きな一方で、考えることは苦手、とエリスの子供らしい面が強いです。
エリスの主張もあってか、後継ぎになることを宿命づけられたせいで、彼もまた色々と悩むことになります。とはいえ彼はエリスの子供、考えることは苦手で、単純に考えてしまうところもあります。しかし、彼が単純に考えてしまったとしても、それをサポートする人が常に横にいるので、問題が表面化することは中々ありません。
それが表面化する話もあるにはあるのですが……今後どこかで出せるといいですね。

・ジークハルト・サラディン・グレイラット
次男で、四番目の子供。
アルスと同じぐらい好奇心が強く、冒険譚が大好きだけど、シルフィの子供らしく、おどおどと弱気な所もある、そんな男の子です。
生まれつき腕力が強く、蛇足編の二巻で北神流に入門したことで、めきめきと剣術の腕を上げていて「将来は英雄だ」と師弟で盛り上がっている感じです。
師匠が師匠な上、兄や姉に比べるとボンヤリしてる所があるので、一番子供っぽく育っていくのですが、なかなかそのまま大人になるというのも難しい。いつか彼が大人になって世界に羽ばたく時にどんな物語が起こるのか、WEB版未読の方はご期待ください。

と、改めて子供たちについて整理しつつざっくりとどういう子か書いてみましたが、子供たちには子供たちで問題点が山積みですね。
当時は「無職転生はあくまでルーデウスの物語で、子供たちの問題は必ずしもルーデウスが解決すべきではない。だから実質無職転生では書けない、その上、そもそも蛇足編はオマケだから幸せな物語を書かなければいけないから……」などと考えて歯がゆく感じていましたが、こうして整理してよくよく考えてみると、拾ってもいい話はまだありましたので、そこらへんは書籍では加筆していきたいものですね。
では、蛇足編の三巻でまたお会いしましょう。
ありがとうございました。